

高槻市文化財調査概要

島上郡衙跡発掘調査概要・4

—高槻市郡家本町・郡家新町・清福寺町・川西町・今城町所在—



1980・3

高槻市教育委員会

は　し　が　き

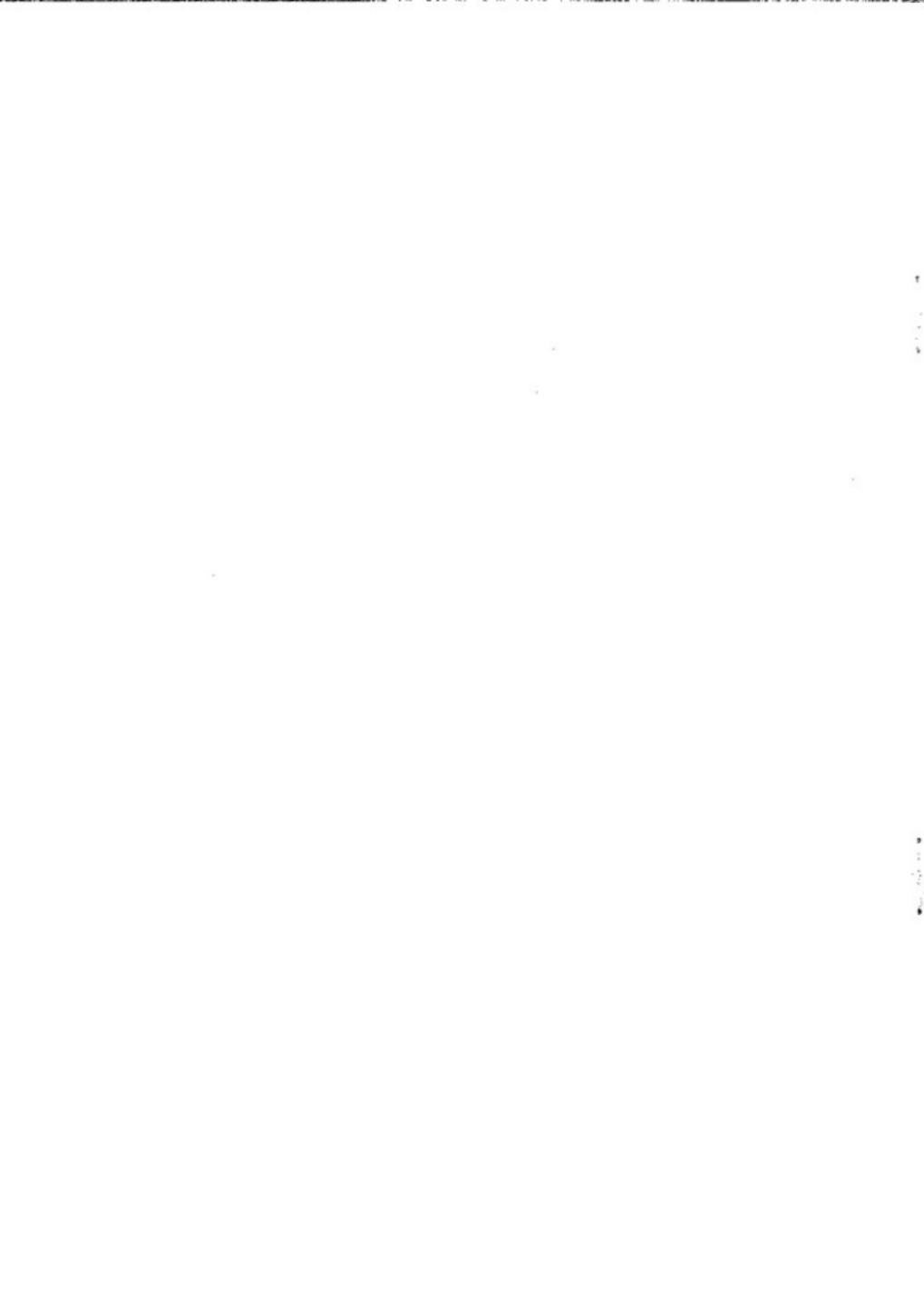
史跡・鳴上郡衙跡附寺跡として、昭和46年5月27日付で、郡衙遺構の保存措置が講ぜられて以来、10年にわたり、周辺部の発掘調査がなされてきた。この永きにわたる調査は、少なくとも、本市の開発の姿を示しているといえるが、この開発にともなう発掘調査によって、多くの貴重な成果や資料が得られたことも事実であり、また、文化財保護の困難さを物語っているといえる。

このような中、今年度の調査は指定地の北東部に集中し、弥生時代から中世に至る数多くの遺構を発見している。とくに、郡衙成立前における集落址のあり方は芥川西岸地域の空間構成を想定する上で、重要な成果であるといえよう。

ここに、今年度実施した発掘調査の結果をまとめ、多くの方々のご教示をあおぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝する次第であります。

高槻市教育委員会

社会教育課長 森 健一



例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が、国庫補助事業（総額6,000,000円）として計画し、調査を実施した高槻市所在、史跡・鶴上郡衙跡附寺跡周辺部の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、高槻市教育委員会社会教育部社会教育課の技術吏員富成哲也、大船孝弘、橋本久和、森田克行が担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和54年5月に着手し、昭和55年3月31日、事業を終了した。
3. 本書の作成にあたっては、写真撮影を鐘ヶ江一朗氏に、遺物整理を新田康二、武村雅一、堤誠三、山本敏幸の各氏に援助を得た。記して感謝の意を表します。
4. 調査の実施にあたっては、大塚義男、羽瀬宏一、莊田新次、奥村英夫、太田八郎、松本松三、園井範久、長谷川洋一、富山俤、櫛堀家工務店、朝日土地㈱、良恵産業などの土地所有者をはじめ、本市文化財保護審議会委員原口正三氏の援助をうけた。ここに記して感謝の意を表します。



島上郡衙跡発掘調査概要

第1章 経過

島上郡衙跡およびその周辺遺跡は、市域を南流する芥川が、郡家川西の段丘に阻まれ、その流れをやや東に変えるあたりの、西南方に広がる低位段丘上に位置する。この地域は、今日においても「郡家」と呼ばれているように、はやくから「島上郡衙」の置かれていたところと考えられていた。

昭和40年、大阪府教育委員会によって、最初の発掘調査がおこなわれて以来、これまで120ヶ所におよぶ調査が実施され、幾多の貴重な資料が蓄積されている。なかでも、昭和45年に調査をおこなった36-P地区の石組井戸から出土した「上郡」と墨書きされた土器は、検出された数々の遺構とともに、この地が郡衙であることを端的に証明した。文化庁においても、こうした成果にもとづいて、昭和46年、「史跡・島上郡衙附寺跡」として、約90,000m²が指定された。そして、その周辺遺跡については、国庫補助事業として、引き続き調査が実施されることとなった。昭和51年度からは、大阪府教育委員会に代って、高槻市教育委員会が国庫補助事業を計画・実施している。以来、現在に至るまでの調査で、郡衙関連遺構はもとより、旧石器時代から近代にわたる数多くの遺構を検出している。

昭和54年度の発掘調査は、昭和54年2月から同年12月まで、国庫補助事業8件、自己負担事業6件の計14件についておこない、記録保存の措置を講じた。本年度はとくに、郡衙北東部の調査が数多くおこなわれ、後述するように、各時代の遺構・遺物を検出している。また、川西古墳群にかかる調査では、前方後方墳が検出されるなど、多くの成果を得ている。

なお、発掘調査から遺物整理まで常に本市文化財保護審議会委員原口正三氏に御指導をいただいた。また調査に際し、心よくご協力いただいた土地所有者の方に感謝之意を表したい。

昭和54年度 島上郡衙跡発掘調査一覧

番号	地 区	調 査 地	面 積	小字名	土木工事等に伴う発掘届出者	備 考
1	7-C-G 地区	高槻市清福寺町781-8他1筆	220m ²	清福之内	神堀家工務店	自己負担事業
2	74-A 地区	高槻市郡家新町151-2	823.99m ²	東藤ケ本	大 駿 織 男	市費負担事業
3	16-L-O-P 地区	高槻市清福寺町808-1他1筆	1,600m ²	大 煙	朝日 土地 物	自己負担事業
4	16-K-O 地区	高槻市清福寺町598-3	165m ²	大 煙	神堀家工務店	自己負担事業
5	6-I 地区	高槻市清福寺町316-1	250m ²	東馬場	羽 稲 宏 一	国庫補助事業
6	北 3 地区	高槻市郡家新町1000-3	64m ²	東上野	奥 村 菜 夫	国庫補助事業
7	75-D-H-L-P 地区	高槻市清福寺町234他1筆	3,014m ²	宛 本	良 忠 庄	自己負担事業
8	北 2 地区	高槻市郡家新町985-1	120m ²	東上野	松 三	国庫補助事業
9	88-M 地区	高槻市清福寺町915-2	112.89m ²	川西北浦	鈴 井 銘 久	国庫補助事業
10	17-P, 18-M 地区	高槻市清福寺町865-1-2-3他2筆	741.25m ²	清福ノ内	莊 田 新 次	国庫補助事業
11	北 4 地区	高槻市郡家新町926-3	187.14m ²	東上野	長谷川 洋一	国庫補助事業
12	72-F 地区	高槻市郡家新町54	452m ²	茶屋之前	富 山 倭	国庫補助事業
13	7-B-C 地区	高槻市清福寺町781-3	330m ²	清福之内	神堀家工務店	自己負担事業
14	17-D-H 地区	高槻市清福寺町806-1	300m ²	清福之内	太 田 八 郎	国庫補助事業

第2章 発掘調査の成果

1. 7-C・G地区の調査(図版第4, 19-1・2, 32, 33-a)

高槻市清福寺町781-3・790-2番地にあたり、小字名は清福之内と称する。現状は宅地と一部畠地である。

今回、分譲住宅を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。調査は、排土および埋め戻し等の関係から、重機を使用した。層序は耕土(約0.2m)・床土(約0.2m)・暗茶褐色土層(約0.6m)となり、暗茶褐色土層からは弥生時代中期から奈良時代に至る遺物が少量出土した。地山は茶褐色土層で、南調査区の北半分は大きな礫が露頭している。地山面の標高は、北調査区で16.7m、南調査区で16.4mを測る。

遺構・遺物

検出した遺構は、弥生時代後期後半の竪穴式住居址と土壙および柱穴などがある。

住居址1. 南調査区の西南隅で検出するが、大部分は調査区域外にあり、規模等は不明である。周溝は幅約0.2m・深さ約0.02m～0.1mと非常に浅く、壁面のたうちあがりは認められなかった。住居址の支柱穴は、径約0.8m・深さ約0.15mを測る。また中央南寄りで、炉跡とみられる径約0.6mの焼土を検出した。その他、この住居址の建て替えと考えられるもう一条の周溝と杭列を、東側周溝に並行した位置で検出した。外側の周溝は、幅約0.15m・深さ約0.02mと浅く、北側の周溝まで続いている。杭列は、柱穴径約0.1m～0.3m・深さ約0.1m～0.3mと小さな割に、底が突っ張るものが多く、規模・位置関係などから住居址に付属する壁体の様なものであったと考えられる。このような杭列は、数多くの住居址を検出している島上部衛跡でも例を見ないものである。

住居址内からの遺物は、ほとんど認められず、周溝内からわずかに数点の叩き目を有する斐形土器片が出土している。以上のことから、この住居址の所属時期については周溝内から出土した土器片をもって、一応決定しうる。

住居址2. 北調査区の南側で検出するが、大部分は調査区域外にあり、規模等についても不明である。周溝は2条あり、建て替えがあつたと考えられる。断面観察では、内側の周溝が埋め戻された後、新しく外側の周溝を北・東側に少し移動して作られていることがわかる。内側の周溝は、幅約0.2m・深さ約0.05mと浅く、北東の隅は接続していない。住居址の支柱穴のうち北東隅の柱穴は、径0.3m・深さ0.15mを測り、柱の建て替えは認められなかった。また住居址の中央部には、炉跡と思われる焼石の入った土壙を2基検出した。南側の土壙は、径約0.7m・深さ約0.1mを測り、焼けた大小の礫が10数個出土した。北側の土壙は、径約1m・深さ約0.05mを測り、同様に焼けた小礫が10数個出土している。

住居址内からの出土遺物は少なく、わずかに甕・壺・高杯・瓶の細片が、暗茶褐色土の埋土中か

ら出土している。時期については、出土土器からみて弥生時代後期後半と考えられる。

住居址 3. 北調査区の北東部で検出したが、大部分は調査区域外であり、規模等は不明である。周溝は幅約 0.15 m・深さ約 0.05 m を測る。埋土は暗茶褐色土で、出土遺物は認められなかった。また周溝に重複して、奈良時代に属すると考えられる長方形の柱穴を検出したが、住居址と同様に北側に拡がっているらしく、関連する柱穴は南側では検出できなかった。

土壤 1. 北調査区の北側に位置し、規模は長辺約 1.5 m・短辺約 1.1 m・深さ約 0.4 m を測り、ほぼ円形の土壤である。埋土は黒褐色土で、包含層に比べて少し粘土質である。遺物はまったく出土していない。

土壤 2. 土壤 1 の南側にあって、規模は長辺約 1.8 m・短辺約 1 m・深さ約 0.3 m を測る。埋土は土壤 1 と同様であり、遺物はない。

土壤 3. 土壤 2 の南側にあって、規模は長辺約 3 m・短辺約 1.2 m・深さ約 0.25 m を測り、断面は舟底状を呈する。埋土は土壤 1 と同様であり、遺物は出土しなかった。

このような規模をもつた土壤は、本遺跡内でも数多く見られるが、今回のように位置関係および埋土等の関係からみて、土壤墓の可能性を秘めていると考えられよう。

遺物は、暗茶褐色土層（包含層）より弥生時代中期から奈良時代に至る各種・各時期の土器片が出土した。これらの多くは細片ばかりで、完形に復元できたものは少ない。出土遺物の中で特に注目されるものに、弥生時代中期の構造文を有する土器が、僅かであるが認められたことである。また、北調査区東南隅の地山面下からは、旧石器時代の国府文化期に属する石核・剣片が原位置の状態で出土した。この付近にも当時のキャンプ地があったことが確認されよう。（大船）

2. 74-A 地区の調査

高槻市郡家新町 151-1-2 番地にあたり、小字名は東藤ヶ本と称する。史跡「鶴上郡衙跡」の西南方約 350 m のところで、旧西国街道の南約 40 m に位置する。現状は宅地であるが、このたび個人住宅改築の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は、重機を使用し、幅 4 m・長さ 10 m のトレシチを設定しておこなった。層序は盛土(0.3 m)・灰褐色粘土層〔整地層〕(約 0.3 m)・灰褐色粘土層〔整地層〕(約 0.4 m)・暗灰色ないし、灰白色粘土層〔地山〕となる。遺物包含層はみられず、遺構も検出できなかった。整地層中から若干の須恵器片や土師器片等が出土している。また、わずかではあるが、炭や灰も検出している。なお、当該調査区の北方約 180 m の地点で、旧石器時代の遺構が検出されているが、今回の調査ではみられなかった。（森田）

3. 16-L-O-P 地区の調査（図版第 5~8）

高槻市清福寺町 898-1-302 番地にあたり、小字名は大畑と称する。現状は水田である。調査地のすぐ北側は府道郡家一茨木線が東西に走り、南側は史跡指定地の北側境界線と接する。東と西側の水田は、昭和 46・49 年に調査がおこなわれ、一部が宅地化されており、指定地北側の水田も

あと僅かしか残っていない。

今回、分譲住宅を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は、申請地（東西40m・南北60m）が広範囲で逆L字形を呈しているところから、重機を使用して南北に反転しておこなった。層序は北側の東西壁面を例にとると、耕土（約0.3m）、床土（約0.1m）、灰色砂礫層（整地層）（約0.2m）、黄褐色土層（0.2～0.4m）、暗褐色土層（約0.2m）、暗褐色土層（0.1～0.2m）で、地山面は黄茶褐色土へ疊層になる。地山面の標高は西端で17.25m、東端で16.55mを測り、比高差約0.7mのゆるやかな傾斜地となって、小さな谷筋になる。こうした地山面の小さな起伏は、本遺跡内において顕著に見られ、遺構の分布状況にも大きく影響を及ぼしている。特に奈良時代の掘立柱建物は、谷筋に並行した高台の縁辺部に集中する傾向を示し、谷筋内の検出は少ない。遺物包含層は、谷筋の低地に堆積した茶褐色土層・暗褐色土層・暗褐色粘質土層であり、弥生時代後期後半から12世紀後半までの遺物を多数包含している。

(A) 遺構

検出した遺構は、弥生時代後期後半から12世紀後半までの長期にわたる住居址・井戸・溝・柱穴・落ち込み・七機・石敷などがある。このような各時代の遺構が重複して密集する地域は、本遺跡の北半分に限られているといえる。

(1) 弥生～古墳時代の遺構

弥生時代後期後半から6世紀末にかけての主な遺構は堅穴式住居址である。その他、溝・土器窓などのがわざかにある。本来、検出した住居址は時代別に分けて記述しなければならないのであるが、重複関係から遺物の遺存状況が悪く確定を時期決定をするのが困難なため、一覧表を作成した。この中で時期決定しうる2基の住居址について記述する。

堅穴式住居址の規模一覧

規格番号	東西辺(m)	柱間(m)	南北辺(m)	柱間(m)	床面積(m²)	方位	時期	備考
1	5.8	2.9	5.8	2.8	33.64	N-25°-W	布留期	西側にベット状遺構
2	5.8					N-40°-W	6世紀末	北辺に焼土
3						N-0°-W	6世紀末	建て替えあり
4			6.9			N-10°-W	6世紀初	建て替えあり・西辺に焼土
5	4.4	2.8	4.4	2.2	19.86	N-25°-W	弥生時代	建て替えあり・中央に焼土
6						N-20°-W	後期後半	
7						N-25°-W	不 明	
8						N-10°-E	布留期	
9						N-10°-E	弥生時代	西・北側にベット状遺構
10						N-20°-E	後期後半	
11	6.4	3.9	6.6	3.9	42.24	N-0°-W	布留期	建て替えあり
12	5.1		5.1		26.01	N-10°-W	6世紀前葉	
13						N-20°-W	庄内期	
14	4.4	2.4	4.4	1.8	19.86	N-20°-W	弥生時代	中央に焼土
15						N-20°-W	後期後半	
16	4.6	2.1				N-10°-W	6世紀末	建て替えあり・北辺にカマド

住居址12は中央部南側に位置する。規模は、辺約5.1mの正方形を呈し、壁高約0.1mを測る。住居址内の柱穴は、径約0.3～0.4m・深さ約0.2mを測り、全体的に小さく4柱穴構造も明確でない。周溝の規模は、幅約0.15m・深さ約0.05mを測り、ほぼ一周していたと考えられる。遺物は床面から、完形品の甕と鉢が出土した。時期は庄内式併行期に比定される。

住居址11は住居址12に重複する大形の住居址である。規模は、東西辺約6.4m・南北辺約6.6mを測り、少し南北に長い。床面からの壁高は、約0.1mと浅く、周溝の深さも約0.03mと非常に浅い。家屋の4柱穴構造は住居址自体が大きいこともある、径約0.7～1m・深さ約0.4mを測り、柱間も約4mと長大なものである。住居址内からの遺物は、包含層が浅かった割に須恵器（蓋杯・高杯）・土師器（釜・羽釜・鍋・高杯・直口壺）などが多数出土した。時期は6世紀前半期に比定される。一方、甕を検出した例として、住居址16があげられる。甕は北辺中央部に設けられ、厚さ約0.1mの焼土が径約0.7mの範囲にわたって見られ、中央部に土師器の高杯が支脚として据えられていた。時期は、床面から出土した須恵器の杯身から、6世紀末頃に比定される。

土器窯1. 住居址8の北側に位置する。土壇の規模は、径約1.8m・深さ約0.2mを測る。遺物の出土状況は、土壤全体に布留式期の土器片多数が拡がり、一部に大きな礫の混入があった。埋土は黒灰色粘土層である。出土した土器のうち、直口壺・小形甕・器台等は、完形に復元することができたが、大部分は細片であるため、復元できなかった。その他、器種として大型甕片が多数認められた。

土器窯2. 建物5の西側に位置する。土壇の規模は、径約1.6m・深さ約0.2mを測り、円形を呈する。遺物は布留式期の土器片が多数表面近くから出土した。埋土は黒色土層である。出土した土器片の大部分は細片であり、完形に復元できたものはなかった。器種では、壺・甕片が大半を占めるが、高杯片も少数認められる。特殊なものとして土製杓子が1点ある。

溝2. 調査区西側を南北に走る短い溝である。規模は長さ約6m・幅約0.5～0.7m・深さ約0.2mを測る。方位はN～10°～Wである。溝の埋土は2層に分かれ、上層（茶褐色土層）、下層（黄褐色土層）である。遺物は6世紀末頃の須恵器・土師器片が少量出土した。

(2) 奈良・平安時代の遺構

この時期の遺構は、掘立柱建物跡・井戸・溝などがあり、調査区全域から検出される。掘立柱建物跡の分布は、大きく井戸1・2を中心とする北グループと、井戸3を中心とする南グループに分けることができる。これらの建物は柱通りと重複関係によって最低6群に分類できる。古い時期の建物ほど柱通りは磁北に対し、西に振り、新しい時期になるにつれて磁北より東に振ることが明らかである。このことは今までの調査によって明らかにされている。

[A群] 柱通りが約20度西へ振るもの。

(建-1・14)

[B群] 柱通りが約10度西へ振るもの。

(建-4)

掘立柱建物跡の規模一覧

規模 番号	梁行		桁行		面積 (m ²)	方位	備考
	間	柱間(m)	間	柱間(m)			
北 グ ル 1 ブ	1	(1.60)		(1.70)		N-20°-W	A群
	2	3間 4.10(1.87)	4間 6.50(1.63)	26.65	N- 0°-W	D群・建-3と重複・主屋?	
	3	2間 3.80(1.90)	3間 5.40(1.80)	20.52	N- 0°-W	D群	
	4	2間 8.40(1.70)	2間 3.40(1.70)	11.56	N- 10°-W	B群・倉?	
	5	3間 4.10(1.87)	3間 4.20(1.40)	17.22	N- 4°-E	E群・建-5と重複	
	6	3間 4.90(1.63)	3間 5.20(1.73)	25.48	N- 5°-W	C群・建-9と重複	
	7	2間 3.65(1.88)	4間 6.65(1.66)	24.27	N- 3°-W	C群・建-8と重複・主屋?	
	8	2間 3.70(1.85)	3間 5.20(1.78)	19.24	N- 0°-W	D群	
	9	2間 3.90(1.95)	4間 8.30(2.05)	31.98	N- 5°-E	E群・主屋?	
	10	2間 3.30(1.65)	3間 4.60(1.58)	15.18	N-10°-E	F群	
南 グ ル 1 ブ	11	2間 3.80(1.65)	2間 4.20(2.15)	14.19	N-10°-E	F群	
	12	2間 2.90(1.45)	3間 4.56(1.52)	13.22	N- 4°-E	E群	
	13	3間 4.80(1.48)	3間 4.70(1.57)	20.21	N- 3°-W	C群・倉	
	14	2間 3.10(1.55)	2間 3.15(1.58)	9.77	N-20°-W	A群・倉?	

[C群] 柱通りが約 5 度西へ振るもの。

(建-6・7・13)

[D群] 柱通りがほぼ南北方向のもの。

(建-2・3・8)

[E群] 柱通りが約 5 度東へ振るもの。

(建-5・9・12)

[F群] 柱通りが約 10 度東へ振るもの。

(建-10・11)

これらの建物群は、柱通りの方向および規模・重複関係から見て、一時期に多くの建物が建てていたと考えられず、各戸門を中心にして 2~3 棟で 1 グループを形成していたらしい。特に建物 2・7・9 は、南北方向に棟を持ち床面積も他に比べて群を抜いて広く、各時期の建物群の中の中心的建物であったと考えられる。

戸門 1. 建-2 と重複する。規模は長径約 2.6 m・短径約 1.6 m・深さ約 0.65 m を測り、不整形な掘り方の戸門である。戸門内の埋土は、黒灰色粘質土で、戸門枠は抜き取られていた。遺物は弥生時代から奈良時代にかけての土器片が、埋土中に少量出土した。

戸門 2. 建-2 の東南部に位置する。掘り方は、上辺部 2.2 m の隅丸方形を呈し、下辺約 1.5 m・深さ約 2.1 m を測る。戸門枠は、高野横の巨木を利用した円形のもので、掘り方底面の中央部に据えられていた。戸門枠の大きさは、径約 80 cm・現存高約 80 cm・厚さ約 10 cm を測り、大木を 4 等分した後、内側を持ち抜いて組み合わせたものである。戸門内の埋土は上層(黒褐色土層)、下層

(黒灰色粘土層)である。井戸内の遺物は、奈良時代の土師器・須恵器片が少數出土し、底部から完形品の杯および「鉢」と書かれた墨書き器が1点出土した。その他、曲物の一部および桃の種子が、同じ底部から多量に出土している。

井戸3 建-13の北側に位置する。掘り方の規模は、長径約2.2m・短径約1.9m・深さ約0.6mを測り、長円形を呈する。井戸枠はすでに抜き去られていた。井戸の埋土は暗褐色土で埋土中から比較的大きな破片の土師器・須恵器片が出土した。

溝1 調査区の北西から東南方向に流れ、W10ラインで急に南下する幅約0.8m・深さ約0.2mの長い溝である。埋土は暗褐色土で、弥生時代から奈良時代までの遺物が少量出土した。この溝は住居址IIを切って流れているところから、それ以後に掘削されたものであるが、奈良時代とする積極的な理由はない。しかし、溝1はあたかも掘立柱建物群の北・南グループを分つかのような位置にあることは事実である。

土壤1 建-12と重複する。土壤の規模は、長径約2.2m・短径約1.2m・深さ0.35mを測り、断面は舟底状を呈する。土壤の埋土は2層に分かれ、上層(茶褐色土層)・下層(茶褐色粘質土層)である。遺物は上層から奈良時代の須恵器・土師器片が若干出土した。

土壤2 建-12の北側に位置する。土壤の規模は、長辺約2m・短辺約1.1m・深さ約0.15mを測り、底部は北側が少し深くなっている。土壤の埋土は暗茶褐色土層であり、6世紀末から奈良時代にかけての土師器・須恵器片が少量出土した。

(3) 鎌倉時代の遺構

鎌倉時代の遺構は、石組井戸・石敷群と掘立柱建物跡と多数の柱穴がある。建物跡はあまりにも規模が小さく、建物自体の規制性が顕著でないこともあって、明確に建物跡を決めることができなかった。しかしながら、この時代の建物跡は石組井戸の西南部に密集する小さな柱穴群であり、その中心部の1辺約4mの浅い落ち込みなども、建物跡に関連するものと考えられる。

石組井戸 調査区の中央部東側にあって、下部に曲物を1段据え、その上部を石組にしたものである。井戸の規模は、上面径約1.2m・底径約0.45m・深さ約1.5mを測る。掘り方の上面は、1辺約2.5mの隅丸方形を呈し、底径は約0.5mと極端に小さくなっている。石組の上段は、大部分が人頭大の河原石を小口積にしているが、下段は1辺約50cmの大きな板状の石をたてて使っており、掘り方下部の規模に対応した構造になっている。石組の現存高は0.7mを測る。下段の曲物は崩壊して現形をとどめていない。埋土は、上層(茶褐色土層)・下層(黒灰色粘土層)である。井戸内からの遺物は、底部から瓦器楕・土師皿・青磁皿等がほぼ完形で出土し、上層からは土師器・須恵器片が少數出土した。また、石組の石材中に、扉の軸受と考えられる台石が使用されていた。台石は破損していたが、大きさが約0.5m角の河原石を利用し、中央部に径約15cm・深さ約10cmの軸受用の穴があり、内面は良く磨滅している。

石敷群 南側中央部の低い部分を取り除くように、大小10ヶ所の石敷を検出した。石敷の規模は、約1mから3.5mまでの大小各様があり、表面の状態も水平なものから積み上げて山形を呈したものまで見られる。石敷の掘り方は、深さ約0.1~0.2mの非常に浅いものが多く、形状も不定形である。石の大きさは、拳大から人頭大の河原石まであり、媒が付着したものまで見られる。共伴遺

物は弥生時代から中世に至る各時代の土器片が、少量混入した状態で出土した。石敷の埋土は黒灰色土で、調査区の包含層の色調では一番新しい時期に比定される。また、この埋土と同じ土層は、住居址12の南側土壠群にも見られ、関連した同一時期の所産物であった可能性が高い。

(B) 遺物(図版第19～25・33～5～45-a)

出土した遺物は各時代の遺構が密集することもあって、膨大で多種多様なものがある。遺物の大部分は、調査地の北東部および南側の包含層中より出土したもので、各時期のものがある。しかし、それらの多くは細片であって、完形に復元できたものは少ない。

(1) 弥生時代の遺物

この調査区で最も古い遺物は、柱穴から出土した大形船刃石斧であろう。共伴遺物である中期の土器は検出されていないが、東約100mの18地区付近から、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式期の土器に伴う扁平片刃石斧・磨製石錐・石庖丁・剥片石器などが出土しており、同じ時期のものであろう。石材は輝緑岩製であり、この周辺では一般的な石材である。重量は995gを測る。

(2) 古墳時代の遺物

弥生時代後半の時期から連続と続く集落であるが、前述したように住居址内の遺物の残りが悪く、良好な資料をあまり得ることができなかった。前期の段階では住-12の庄内式併行期の遺物があげられるが、蓋・鉢のみで数は少ない。土器の調整および器形から、庄内式期でも新しい時期に比定されよう。布留式期の遺物は、土器窓2ヶ所と住-7・10から多量に出土している。器種別に見ると、大部分は小・中形の甕であり、高杯・大形甕・小形甕・直口甕・器台等が少数見られる。布留式土器は全体的に作りが洗練されているのであるが、器壁の厚さが不揃いのものや調整が難なものが一部に見られる。今回の調査では、須恵器が出現する5世紀中頃のものはみられないが、6世紀代に入ると急激に遺物は増大する。特に6世紀前半頃に比定された住-11の遺物は、本遺跡では初めてのものであり、長脚一段の高杯に伴う一括資料は、三島地方でも特筆すべきものであろう。6世紀後半頃になると、小形の住居(住-14・16)・溝2の遺構に伴って量は少ないが、遺物が出土する。出土遺物の大部分は南側の包含層から出土したもので、多数の蓋杯・高杯・すり鉢・提瓶・器台・甕等の須恵器製品がある。土師器は風化と破損が著しく、他の時期と明確に区分できなかった。また、例外的な出土であるが、円筒埴輪片が若干包含層から検出されている。

(3) 奈良時代の遺物

この時代の遺物は、包含層および遺構から多数出土しているが、完形品に復元できたものは少ない。遺物の大部分は、須恵器・土師器片であり、僅かに井戸2から出土した木製品・植物遺体がある。この時期の遺物は、厳密に7世紀・9世紀代に入るものと区別されていない。

須恵器の器種では、蓋杯・摺鉢・鉄鉢・有蓋短頸甕・長頸甕・細頸甕・甕などが多く出土しているが、郡衙遺構に伴うような硯等は見られなかった。土師器の器種では、蓋杯・高杯・甕・釜・瓶・羽釜・甕・製塩土器などがあり、井戸2の底部から出土した杯には「船」と墨書きされている。また墨書き土器と共に出土した杯には、口縁部に墨の付着が見られ、證明皿に使用されていたことが推測される。

井戸2出土の木製品は、曲物の底板・側板の部分品以外に、薪の燃え残りのような端部が炭化し

たものもある。井戸枠は、高野横の巨木から作られた立派なものであるが、本調査区の南約100m、27-1地区からも、同様な井戸枠が昭和44年に検出され、2例目を数える。また井戸2からは、桃の種子が小形のバケツに約一杯分も出土している。種子の大きさは平均約3mm位であるが、一定していない。種子の多くに、虫食い穴が見られる。

(4) 平安時代の遺物

今回の調査区では、奈良時代と平安時代の遺構を明確に区分できる資料の出土は少なかった。掘立柱建物跡も全て奈良時代にしたが、すぐ北の16-B・C・F・G地区の調査では、柱通りの方向がN-7°-Eの建物を10世紀前半頃と推定しており、多くの建物跡が平安時代に属する可能性が高い。出土遺物の中で確実に平安時代に所属するものをあげると、南側包含層出土の黒色土器片・綠釉陶器片・灰釉陶器と瓦片などが僅かにある。その他土師器・須恵器等も多数出土していると考えられるが、奈良時代のものと区別することができなかった。

(5) 鎌倉時代の遺物

包含層中からの出土遺物は、石組井戸を中心とする狭い範囲からのみで、北・西側の周辺部からは検出されなかつた。これらの遺物は大部分が瓦器碗であり、土師器皿・須恵器・鉢・青・白磁碗なども若干出土している。完形に復元できたものは、石組井戸の底部から出土したものが多く、瓦器碗は全て口縁部に凹線を入れた結葉タイプのものであった。しかし、柱穴から出土した中に和泉タイプの瓦器碗も少量認められる。一方、瓦器碗の多くは全体に炭素を吸着せず、高台の作りも粗雑なものが多い。

木製品では、石組井戸の下段に使用されていた曲物があるが、腐蝕して細片にならっているため、全体を知ることができない。推定径約45cmを測る。また石組井戸のすぐ北側包含層からは、火成岩製の河原石を利用した叩き石が出土している。叩き石の打撃箇所は4ヶ所あり、堅い物を叩いてできた打撲痕というよりも、柔らかい物を押し潰すような時にできる痕跡を示す。これとほぼ同じ叩き石が、高槻市東部の上牧遺跡からも出土している。重量は620gを測る。(大船)

4. 16-K・O地区

高槻市清福寺町898の3番地にあたり、小字名は大畠と称する。史跡「輪上郡衙跡」の北側約20mに位置する。現状は水田であるが、今回宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ発掘調査を実施した。

遺構・遺物(図版第9・30・45-b)

調査は南北隣から開始し、順次西と北へ拡張した。層序は、耕土(0.2m)・床土(0.1m)・茶褐色土層〔遺物包含層〕(0.1~0.2m)・黄茶褐色疊土層〔地山〕となる。地山面は標高17.3mである。

(1) 弥生時代の遺構・遺物

この時期の遺構としては、住居址2基と落ち込み1ヶ所、及び若干のビットなどがある。住居址1は調査区の西側寄りで検出されたが、西辺は調査区域外になり、北辺は落ち込み1に沿って削られているため、全体の大きさについては不明である。支柱のビットと考えられるもののうち、3つ

はやや東に偏しているくらいがあり、また、残りの南西部のピットも支柱穴とすれば、4柱穴を結ぶ形は異形となり、やや不可解である。ただ、住居址の中火部と考えられるところに、径0.5m・深さ0.2mを測り、底部に焼土と灰を残すピットが検出されていることから、ほぼ1辺5mの方形住居址に復元することができよう。側溝は幅0.2m・深さ0.1~0.2mを測り、溝底には径0.1m内外の小さなピットが10ヶ所余り検出された。壁板を支える杭穴であろうか。埋土は2層みとめられ、上層は茶褐色土層（遺物包含層と同質）、下層は黄茶褐色土層である。出土遺物としては、畿内第V様式期の土器片と須恵器片が検出されているが、後者は数片のみで、後からの混入と考えられる。圧倒的多数は前者である。住居址の時期については、炉跡とみられるピットから、畿内第V様式期の土器片のみが出土していることと、側溝からも、畿内第V様式期の土器片のみを検出していることからみて、弥生時代後期と考えられる。住居址2は、調査区の北東隅でごくわずか検出された。この住居址は隣の調査区でも検出されており、弥生時代後期のものと判明している。落ち込み1は調査区の北東部で住居址1を切り込んだかたちで検出された。範囲としては、5m×5mの扇形になるが、西や北へいまし拡がるものと思われる。落ち込みの程度は極めて浅く、数cmから深いところで0.1mである。中心部分と思われるところでは、2m×1mの範囲に炭と焼け土が拡がっていた。埋土は茶褐色土で、出土遺物は、畿内第V様式期の壺片・甕片・鉢片等20余片の他、土玉（径1.9cm）が1点検出されている。土玉の頂部には、径0.7cm・深さ0.4cmの円形のくぼみがみられる。また甕2の底部には、木葉痕と楕の圧痕がみられた。ピット類については、建物遺構としてまとまるものではなく、また特筆すべきものもない。その他の遺物では、鉢（図版第30-7）がピットから出土している。わずかに突出する小さな底部に、内縁しながら大きくひらく体部を有する。口縁部は体部上端を外方へ折りさせて成形している。内外面ともナデ調整をほどこしている。色調は褐色。鉢（同一6）は包含層から出土したもので、大きくひらく体部に、内縁気味に外反する口縁部を有する。ただ、底部の形態がやや特異で、尖底気味の底部周辺に粘土紐を巻きつけ、それを指でなでつけて成形しているため、輪状の高台の如くなっている。体部外面はナデ調整、内面は不明、口縁部外面はナデ調整、内面はヘラミガキがみられた。その他にも包含層から水差形土器の破片や後期の甕などが検出されている。

(2) 古墳時代の遺構・遺物

この時期の遺構と考えられるものとしては、住居址1基、溝2本がある。住居址3は、調査区の北辺東側に位置しているが、検出したのは住居址の南側の1部で、大部分は調査区域外である。1辺約7.4mの方形住居址で、郡家川西遺跡の弥生時代後期から古墳時代後期にかけての住居址の中では大きい部類である。側溝は、幅約0.25m・深さ約0.1mを測る。住居址南辺部に、0.8×0.6m以上・深さ0.2mを測る隅丸方形のピットと、1.2×0.6m以上・深さ約0.15mを測る隅丸方形のピットが検出されている。この2つのピットは独立性の建物遺構として他に組み合うピットが検出されなかつことや、埋土が茶褐色土で、住居址の埋土と全く同質であることから、住居址と組み合う遺構と考えられる。この類のピットは、郡家川西遺跡のこれまでの調査で、しばしばみられるところである。住居址の埋土からは、畿内第V様式期の土器数10片（甕など）・古式土師器若干・須恵器（器台片1片）が出土している。このうち須恵器片は後世の混入であろう。時期とし

ては弥生時代末～古墳時代初頭と考えられるが、弥生時代後期の住居址2を切って、つくられていることから一応古墳時代初頭と考えられる。溝1は調査区の中央を南東の方向へ、斜めに横断するように検出された。幅約0.7m・深さ約0.25mで、南へたどるほど、溝底は低くなっている。埋土は茶褐色土層で、遺物としては、弥生式土器片(V)・土師器片・須恵器片等がある(図版第45-b)。土師器の中では、鍋の把手部分の破片3他が目立ち、須恵器では器台片4・麁片5が検出された。時期としては、この溝の延長部分が跡の調査区で6世紀前葉の住居址を切っているところから、6世紀後半以降に比定できよう。溝2は調査区の西寄りを南北に貫流するもので、幅約0.2~0.45m・深さ約0.1mを測る。埋土は2層あり、上層は茶褐色土、下層は黄茶褐色土である。しかしその差異は顕著なものではない。遺物は弥生式土器(V)・土師器・須恵器などである。土師器のなかには竈片6・須恵器の中には平瓶の破片7がそれぞれ含まれている。時期的には、埋土の状況や遺物、また方形ピットに切られていることなどから古墳時代後期と考えられる。その他に時期不詳の遺構として、土壙2基、落ち込み1ヶ所、及び若干のピットがある。土壙1は調査区の中央北寄りで検出され、長さ1.8m・幅0.9m・深さ0.35mを測る。埋土は2層みとめられ、上層が茶褐色土・下層が茶褐色粘土で、全く遺物を検出しなかった。土壙2は、調査区北辺中央で検出されている。形状としては、方形土壙と考えられるが、大部分は調査区域外に存する。深さは0.1mを測る。埋土は淡茶褐色土で、遺物としては弥生式土器(V)・土師器・須恵器などが出土している。中に受口状口縁土器の退化したような土器8が1点みとめられた。時期的にはこの土壙が弥生～古墳時代の包含層である茶褐色土層を切って、掘さくされていることや、土師器の中に奈良時代と考えられる皿片が出土していることなどからみて、8世紀以降のものであろう。落ち込み2は調査区の東辺北寄りで検出された。甚だ不定形な落ち込みで、一部は調査区域外にある。埋土は土壙2と同じで、出土遺物は、土師器(鍋片・麁片・皿片他)・須恵器(壺片他)等である。時期的には土壙2と同様、奈良時代以降と考えられる。他にも若干のピット類があるが、特筆すべきものはない。(森田)

5. 6-I 地区の調査(図版第59)

清福寺町316番地の1にあたり、小字名は東馬場と称する。現状は宅地である。阿久刀神社の西方に位置し、周辺部のこれまでの調査では弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出されている。今回、個人住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえで発掘調査を実施した。

遺構・遺物

約0.5mの盛土を除去すると、旧耕土(0.1m)・床土(0.05m)・褐色土(0.3m)と堆積し、地山は疊を多く含む黄褐色土である。

調査区の東壁沿いに深さ0.4mの南北方向の溝を検出した。東側の肩部を確認できなかったため、その規模は不明である。溝内には砂礫を混じえた青灰色粘土が堆積し、瓦をはじめ、備前焼・中国製磁器・須恵器等が検出された。調査区のすぐ東側には現在使用されている水路があるところから、この水路は検出された溝を躊躇したものであろう。他に、遺構は検出されなかった。

出土した備前焼はすべて描鉢で、完形品は無いが、口縁部の形態から間隙編年のN-a・N-b期に

相当する。青灰色の須恵器質や淡褐色で焼成の悪いものも含まれるが、概して赤褐色で焼成は良好である。中国製磁器は奄京窯系青磁の碗・皿がある。碗は外面無文で、内底面に草花文のスタンプが押されている。内外面をすべて施釉し、底部外面を輪状に釉を削り取っている。また、口縁が外反するものや、口縁部外面に錦襷井の簡略化された碗の破片もある。皿は高台が削り出され、体部下位が屈折し、体部外面は雷文の簡略化されたもので、内面は放射状、内底面は草花文風の籠形りがみられる。胎土は白色・精良で、釉は青緑色で厚い。須恵器は東播系のものとみられ、粗鉢の破片である。灰色で砂気が多い。(横本)

6. 北 3 地区の調査(図版第 59)

郡家本町 1000番地の3にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。鳩上郡衙後背の台地上に位置している。周辺から弥生式土器が出土しているところから、集落の存在が想定されていた。今回、個人住宅改築の目的で、土木工事に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

届出地の中央部に $4\text{m} \times 4\text{m}$ の調査堀を設けたところ、約 0.4m の盛土下に旧耕土 (0.05m)、褐色土 (0.1m) と堆積し、地山は粘質の黄褐色土で、南へ徐々に下降している。

遺構は柱穴を三個と細い溝を検出しただけである。柱穴および褐色土から畿内第V様式土器の破片が出土しており、弥生時代後期の集落が存在していたことが判明した。しかし、その規模等については今後の課題である。(横本)

7. 75-D・H・L・P 地区の調査(図版第 10, 11, 25-8, 9, 46-C, 47)

高規市郡家新町 228・234番地にあたり、小字名は宛本と称する。現状は水田であり、西国街道(旧山陽道)と市道辻子・下ノ口線の交差点より南に約 80m 下った西側のところである。すでに西・北側は宅地化され、南側は自動車整備工場となっている。周辺地域における発掘調査は、75-M～P地区(昭和46年度)、74-D・H地区(昭和52年度)、65-D・P地区(昭和53年)など広範囲にわたっておこなわれている。その結果周濠のみが遺存する多数の古墳(5～6世紀末)、方形周溝墓(弥生時代中期～後期後半)等が径約 200m の範囲から検出されている。今回の調査地は、その範囲のはば中央寄りにあたり、当然多数の古墳・方形周溝墓の検出が予測されるところであった。

今回、資材置場を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は、申請地(東西 25m ・南北 180m)が南北に非常に細長く、盛土の搬出・埋め戻し等の関係から、重機(エンボ・ブルトーラー)を使用した。層序は、床土・包含層がほとんど存在せず、耕土下はすぐに黄褐色土層[地山]になる。地山面の標高は、北側 18.8m 、南側 18.3m を測り、地形的には東南方向に対しややゆるやかに傾斜する。

遺構・遺物

検出した遺構は、弥生時代後期後半の方形周溝墓・古墳時代前期の円墳・後期の方墳・前方後方墳・土器棺・土壙と自然流路などがある。

(1) 弥生時代の遺構

方形周溝墓 調査区の中央部北側に位置する。周溝の南と北はそれぞれ前方後方墳1.と、円墳の周濠とが重複している。規模は、南北辺約6.8m・東西辺約5mを測り、南北に少し長い。周溝は幅約0.5~1m・深さ約0.2~0.25mを測り、一巡していたと考えられる。周溝内の埋土は、上層（黄褐色土層）、中層（暗褐色土層）、下層（茶褐色土層）に分別ができる、西・南・北溝の中層・下層から、風化の著しい弥生式土器片が若干出土している。また、上層から須恵器・鉄器片が出土した。主体部は消失している。

溝1. S 470 ラインから調査区の西南隅に向て縱走する幅約0.5~0.7m・深さ約0.25mの長いU字溝である。溝中の埋土は、上層（灰褐色土層）、中層（黒褐色土層）、下層（黒灰色粘質土層）に分別できる。遺物は、風化の著しい弥生式土器片が若干ではあるが、全体にわたって出土した他、方形周溝墓のすぐ東側付近では、比較的完形に近い壺形土器が5個体分出土している。しかし、これらの土器はいずれも細片で風化が著しく、完形に復元することができなかつたが、器形および叩き目を有する技法からみて、弥生時代後期後半に比定できよう。

溝2. 溝1.の西側を並行して走る幅約0.2m・深さ約0.05mの溝で溝底が部分的に遺存する。埋土は灰褐色土で、遺物は出土しなかった。時期については溝1.と並行関係にあることを認識するならば同時期のものと考えられる。

溝3. 方墳4の東側に位置し、東南方向に向ってゆるやかに傾斜する。規模は幅約1.8m・深さ約0.3mを測る。溝中の埋土は、上層（茶灰色土層）、中層（茶褐色土層）、下層（灰色砂質土層）に分別できる。遺物はまったく出土せず、時期は不明である。

(2) 古墳時代の遺構

円墳 調査区の中央北寄りで、方形周溝墓の北側に位置し、北側周溝と円墳の周濠とが重複している。墳丘の規模は径約8.4mとはほぼ円形であり、周濠は幅約1~2m・深さ約0.8~0.45mを測る。北側の周濠には、3ヶ所の突出した浅い掘り込みがあり、西側の突出部からは庄内式併行期の供獻された壺形土器が2個体出土している（図版第25-8・9）。周濠内の埋土は上層（黄褐色土層）、中層の上（暗褐色土層）、中層の下（暗灰色土層）、下層（茶褐色土層）に分別できる。主体部は消失している。

方墳1. 調査区の北東隅で検出したが、大部分は調査区域外にあり、規模等については不明である。周濠の幅は約6m・深さ約0.5mを測る。周濠内の埋土は2層に分かれ、上層（黒灰褐色土層）下層（黒灰色粘土層）である。遺物は上・下層から多数の円筒埴輪・家形埴輪片と、若干の須恵器・土師器が出土した。時期は埴輪・須恵器片から6世紀中頃に比定されよう。

方墳2. 調査区の中央部にあって、南側半分が一段低く削られているところから、全貌については不明である。墳丘の規模は、東西辺約7m・南北辺約8.4mを測り、少し南北に長い。周濠の幅

は東濠約 1.9 m・西濠約 2.8 m・北濠約 2 m を測り、深さはいずれも約 0.2 m を測る。周濠内の埋土はほぼ 2 層に分かれ、上層（黄褐色土層）、下層（暗灰色土層）である。周濠内からの遺物は少なく、北濠から 7 世紀初頭の須恵器杯片が出土した他、西濠からは溝 1 に重複するためか弥生式土器片が若干出土している。主体部は墳丘の中央部に、主軸を墳丘と同じ南北にそろえた墓壙を検出した。墓壙の規模は、長辺約 2.5 m・短辺約 1.1 m・深さ約 0.05 m を測る。埋土は黄褐色土層である。上部が削られたため、遺存状況はよくない。しかも墓壙の南側は田が一段低くなるために、消失していた。墓壙内の木棺の痕跡および副葬品等は検出できなかった。時期は北濠出土の杯片から 7 世紀初頭頃と考えられる。

方墳 3. 方墳 2 の南側に位置する。北濠は方墳 2 の南濠を新しく切って重複する。墳丘の規模は、東西辺約 5.6 m・南北辺約 6.4 m を測り、少し南北に長い。周濠の規模は、東濠幅約 2.1 m・深さ約 0.1 m・西濠幅約 2.2 m・深さ約 0.15 m・南濠幅約 2.8 m・深さ約 0.15 m・北濠幅約 1.5 m・深さ約 0.1 m を測る。周濠内の埋土はほぼ 2 層に分かれ、上層（茶褐色土層）、下層（黒褐色土層）である。方墳の中央部を溝 1 が南北に走るために、濠内からの遺物は弥生時代後期後半の土器片が若干出土した他、7 世紀初めの杯身および奈良時代の須恵器壺片が出土している。墳丘内からは、主体部と推定しがたい土壙を 1 基西濠寄りで検出した。土壙の規模は、長辺約 1.9 m・深さ約 0.4 m を測り、埋土は黄褐色～暗灰色粘質土がレンズ状に落ち込んでいた。土壙内から副葬品等の出土はなく、埋土中から弥生式土器片が 1 点出土した。

方墳 4. 方墳 3 の南側に接して位置する。西側の一部は調査区域外にあり、全貌については不明である。墳丘の規模は、東西辺約 9.1 m・南北辺約 10.7 m を測り、少し南北に長い。周濠の規模は、東濠幅約 4.2 m・深さ約 0.1 m・西濠幅約 2 m・深さ約 0.1 m・南濠の幅約 2 m・深さ約 0.05 m・北濠幅約 2.8 m・深さ約 0.1 m を測る。周濠内の埋土は 2 層に分かれ、上層（茶褐色土層）、下層（暗褐色土層）である。周濠内の遺物は少なく、溝 1 と重複することもある、弥生時代後期後半の土器片が若干出土した。主体部は削平を受けているために検出できなかった。

前方後方墳 1. 調査区の中央部にあって、後方部の大部分が調査区域外に存在する。墳丘の規模は、前方部幅約 6 m・前方部長さ約 7.5 m・クビレ部幅約 4 m・後方部幅約 13.5 m を測る。周溝の規模は、前方部東濠幅約 1.1 m・深さ約 0.2 m・南濠幅約 1.2 ～ 5.7 m・深さ約 0.2 m・北濠幅約 1.2 ～ 6.5 m・深さ約 0.3 m を測り、後方部有濠幅約 3.1 m・深さ約 0.2 m・北濠幅約 2.2 ～ 4.6 m・深さ約 0.4 ～ 0.6 m を測る。周濠内の埋土は 2 層に分かれ、上層（茶褐色土層）、下層（暗灰色土層）である。周濠内の遺物は少なく、全体から 6 世紀後半墳の須恵器の器台・蓋杯片・土師器片と弥生式土器片が出土した他、埴輪はまったく出土しなかった。なお、前方部東濠の中央部からは、長さ約 6.5 cm の土鉢が完形で出土している。

前方後方墳 2. 調査区の北西隅にあって、前方部北濠は、方墳 1 の周濠を新しく切って重複する。後方部の墳丘の一部は調査区域外にある。墳丘部全体の遺存状況はよくないが、その規模は、前方部幅約 6.5 m・前方部長さ約 7.4 m・クビレ部幅約 3.8 m・後方部幅約 1.4 m を測る。周濠は、前方部東濠幅約 1 m・深さ約 0.2 m・南濠幅約 1.5 ～ 6.7 m・深さ約 0.15 m を測る。北側の周濠は不明である。周濠内の埋土は大きく 2 層に分かれ、上層（茶褐色土層）、下層（黒褐色土層）である。

周濠内からの遺物は、円筒埴輪片・土器器片が南濠より少量出土した。時期は、周濠が方墳1.を新しく切っていることと、埴輪片が最も新しい時期のものであることから、6世紀後半と考えられる。

土器棺 円墳の北西部に位置する。掘り方の規模は、径約0.6mのほぼ円形を呈し、深さ約0.4mを測る。土器棺は鉢形土器を上下に2個体合せ、掘り方の南側に寄せて据えられていた。土器棺の法量は、口径約25cm・腹径約30cm・器高約20cmを測り、上下ともほぼ同じ大きさである。時期については、土器棺全体の風化が著しく、完形に復元できなかつたが、器形ならびに技法などには布留式土器の特徴を示している。

自然流路 調査区の南側に位置し、西方から蛇行しながら東流する大きな水路である。流路は一定しておらず、幾度か方向を変えたためにその幅も約1.5～6mと一定しない。また、深さも約0.6～1mを測り、その堆積土は暗灰色砂質土層、黒色粘土層が互層になっている。流路が埋没した後の窪地には、黄褐色砂質土（整地層）が薄く堆積し、奈良時代から中世にいたる遺物を若干包含していた。

今回、出土した遺物は、弥生時代後期後半の遺構に伴う遺物から、水田開墾時の整地にあたって混入したものまで長期間にわたっている。しかも、その遺存状態は悪く、特に溝1.出土の完形に近い弥生式土器や土器棺等は、風化が著しく復元することができなかつた。その他、出土した遺物の特徴を列挙すれば、圓府型ナイフ形石器・削器・劍片が中央部の落ち込みから出土している。また、縄文時代に属すると考えられる石鏡2点も付近から同様に出土した。弥生時代後期後半の遺物は、溝1.が調査区の中央を走っているために、ほぼ全域から出土するが細片が多く、土器の復元および溝1.の性格決定するまで至っていない。しかしながら、弥生時代の遺構は、方形周溝墓と細長い溝のみであって柱穴はなく、あらためて当時の墓地の利用方法が問題になろう。

古墳時代の遺物の出土量は少ない。埴輪は、方墳1.と前方後方墳2の2基からのみで、この周辺でこれまで検出している古墳には全て埴輪を所有していたとの比べて特異といつてもいいものであろう。また、7世紀代の小形の方墳群は、周濠内からの出土遺物がほとんどない。一方、奈良時代以降に属す須恵器・灰釉陶器・瓦・瓦器片は調査区の南側整地層から出土しているが、これらの遺物に関連する遺構は認められず、古墳群の盛土が削除され、開闢された時期を示す資料であろうか。（大船）

8. 北2地区の調査

郡家本町985番地の1にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。嶋上郡衙跡の北方丘陵上にあって、すぐ西方からは、弥生時代の遺構が検出されており、その拡がりを知るうえでも重要な地点である。今回、個人住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

届出地の一隅に、3m×3mの調査 sondageを設けたところ、約0.5mの盛土下に旧耕土（0.1m）、床上（0.15m）と堆積し、部分的にであるが、床土下に暗灰色土がブロック状に混入している。その下は黄褐色砂疊層が厚く堆積している。

遺構・遺物はまったく検出されなかった。(横本)

9. 38-M 地区の調査

高槻市清福寺町 915-2 番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。

今回、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は、中央部に東西 6.5 m・南北 2.5 m のトレンチを設けておこなった。層序は、盛土 (0.3 m)・耕土 (0.2 m)・床土 (0.3 m)・暗茶褐色土層 (0.1 m) [遺物包含層] となり、地山面は茶褐色土層になる。地山面は標高約 15 m を測り、ほぼ水平である。

遺構は、調査範囲も限られたため検出することができなかつた。調査地から東・南側一帯においては、弥生時代中期から後期にかけての方形周溝墓や土壙墓群が群在する墓域が広がり、一方、本調査区の北側約 40 m の地点では、弥生時代後期後半の住居址群が検出されている。調査地はそのほぼ中間に位置し、遺構の少ない地域であったと推定される。

遺物は、時期不明の土器片がわずかに数点出土したのみである。(大船)

10. 17-P, 18-M 地区

高槻市清福寺町 855-1・2・8、857-2・3 番地にあたり、小字名は清福ノ内と称する。史跡「鳴上郡衙跡」の北東隅部に隣接しており、現状は宅地である。今回、個人住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、記録保存の措置を講ずすべく、発掘調査を実施した。調査予定面積は約 740 m² である。これまでの周辺の調査結果からみて遺構面の深いことが充分予想されたため、調査区を南北に 2 分して、調査をおこなつた。

(A) 遺構 (図版第 12・13・14・15)

調査は、まず調査区域の両半分を重機で包含層まで掘り下げ、遺構面を追求した。その結果、弥生時代中期の遺構面と、弥生時代～古墳時代中期の遺構面と、弥生時代～古墳時代前期にかけての遺構面を検出した。また、北半分の調査では、両時期の遺構面とともに、N 130 ライン以北において、中世の遺構面が部分的にみとめられた。この中世の遺構面は、18-E 地区等で検出している中世聚落跡の南端部に相当するものと考えられる。主な層序は、表土層 [残食土層] (0.1 m)・黄褐色土層 [盛土] (0.4 m)・淡茶灰色土層 (0.2 m)・淡黃灰色土層 (0.2 m)・淡茶褐色土層 (0.2 ~ 0.3 m) [以上整地層] ・茶灰色砂質土層 (一部) [中世包含層] (0.2 m)・灰褐色砂質土層 (一部) [整地層] (0.02 ~ 0.1 m)・灰黃褐色砂質土層 [古墳時代の包含層] (0.2 ~ 0.3 m)・灰褐色砂質土層 [弥生時代後期～古墳時代初期にかけての包含層] (0.1 ~ 0.2 m)・茶褐色土層 [弥生時代中期の包含層] (0.1 ~ 0.3 m)・暗茶褐色土層 [無遺物・堆積土層] (0.2 ~ 0.5 m)・黄褐色礫土層 [地山] となる。ただし、灰黃褐色砂質土層と灰褐色砂質土層との境は、不明瞭である。また、弥生時代中期の遺構面は、標高 15.2 m である。

(1) 弥生時代中期の遺構

この時期の遺構としては、円形土壙 1 基、土壙 4 基、落ち込み 2 ケ所、及び不定形な溝状遺構が

ある。円形土壙は調査区中央の東寄りで検出した。直径約8.2mのほぼ正円形を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色土で、中から土器片・サヌカイト片2点を検出した。土器は畿内第III～V様式期のもので、壺・甕・鉢片等がふくまれている。土壙内の東寄り中央で、直径0.35mを測る焼け土と炭の薄い層を検出していることや、同じく北西部で長さ0.5mにわたって円弧状の便溝らしきものを検出していることなどから住居址の可能性がある。土壙1は、長径2.4m・短径1.1m・深さ0.15mの隅丸の長方形を呈し、土壙内から畿内第III様式期の土器片が少量検出されている。土壙2は、長径1.8m・短径0.8m・深さ0.08mを測り、長円形を呈する。土壙内から中期の土器片を若干検出した。土壙3は、長さ約2m・幅約0.5m・深さ約0.2mを測り、三日月形を呈する。土壙内からは、畿内第III様式期の土器片と考えられるものが30点余出土している。土壙4は、長さ4.2m・幅約0.8m・深さ約0.2mを測り、溝状を呈している。土壙内からは、畿内第III様式期の土器を中心とする中期の土器片が多数出土している。器種としては壺や鉢が多い。また、木炭片も目立ち、壙底一面に薄くみられた。落ち込み1は、南北約3.6m・東西1.2m以上・深さ0.2mを測り、西側は溝1によって切られている。底面はほぼフラットで、極く薄い炭の層がみとめられた。埋土は暗茶褐色粘土質土で、中から弥生時代中期の土器片が若干出土している。落ち込み2は調査区の北辺中央で検出された。東側は溝1に切られており、北側は調査区域外であるため、大きさ・形状については明らかでない。現存長は東西4.6m・南北2.4m・深さ約0.15mを測る。埋土中から畿内第III様式期の壺片等が出土している。不定形溝状遺構は、調査区東辺中央部で検出されたもので、幅0.8m前後の溝と、幅0.2m前後の溝が、縦横に交叉したような状況を呈している。これは調査時において、弥生時代中期の地山である暗茶褐色堆積土と弥生時代中期の茶褐色土とが、非常に似かよった土質で、遺構を掘り下げる際にその立ち上り部を追求した結果である。この遺構から中期の土器片が1カ所にかたまって出土していることや、北の方へ溝が直線的に延びないことなどから、土壙と溝、あるいは、土壙と土壙が切り合っているとも考えられる。また幅0.2mの東西方向の溝は、円形土壙に伴う遺構かもしれない。

(2) 弥生時代後期の遺構

この時期の遺構としては、住居址1基、土壙3基およびピットなどがある。

住居址1(図版第18-a)は、調査区南辺部で検出され、その一部は調査区域外にある。1辺5.2mの方形プランを呈し、4柱穴構造をもつものである。住居址の中央部では約0.05mの茶褐色土層をはさんで上下2層の焼土層がみとめられた。両方とも、焼土の周辺にはうすく炭と灰が張がっていて、上層は厚さ0.05m前後を測り、中央が若干凹んで皿状になっている。中から畿内第V様式期の土器片が出土している。下層は、厚さ0.08m前後を測り、下面がほぼフラットなところから、住居址床面に相当するものと考えられる。住居址の中心部にあたるところでは、径0.2mの小さな凹みがみられ、底部から焼土と炭を検出した。さらに、住居址の北寄りのところでは径約1m・深さ0.2mの円形土壙がみとめられ、貯蔵穴のようなものと考えられる。このような土壙は、これまでの島上郡衙跡の調査でも、しばしば検出している。またこの円形土壙の東西に浅い落ち込みが検出されていて、中から古式土師器の細片が出土している。埋土は黄褐色砂質土と茶褐色土の混土であり、住居址に関連する遺構とはおもむれないとされる。住居址の遺物としては、埋土や柱穴から畿内第V様

式期の土器片が出土している。土壙は、3基とも主軸をかかむね東西方向にもち、相接して並列的に検出された（図版第14-a）。土壙5は、長さ2.3m・幅1.2m・深さ0.06mを測り、底部はほぼフラットである。埋土は黄茶褐色砂質土で、遺物は出土しなかった。土壙6は、現存長2.8m・幅約1m・深さ0.07mを測り、底部は、同じくほぼフラットである。埋土は、2層あり、上層は黄茶褐色砂質土で、下層は黄褐色の砂である。土壙の西端には、径0.75mの円形土壙があり、その底部は浅鉢状を呈している。この円形土壙には一面に炭の層があり、一部は、東の方へ拡がり土壙床面を覆っていた。遺物としては、畿内第V様式期の甕・高杯・鉢がそれぞれ1点ずつ出土している。そのうち、甕は円形土壙内から、高杯は土壙床面から（一部円形土壙に落ち込んでいた。）、鉢は土壙床面から若干浮いた状態で検出された。土壙7は3基のなかで、1番北側に位置し、現存長4.0m・幅約1.2m・深さ0.15mを測る。埋土は黄茶褐色砂質土である。底部はほぼフラットで土壙5・6の底面との間に比高差はほとんどない。遺物としては、畿内第V様式期の甕2点、鉢1点及び約0.3×0.2mの扁平な石が出土している。このうち甕1点は兎形に近く、おしつぶされた状態で検出され、鉢は底面から約5cm浮いたところで下向きになって検出された。石は土壙中央よりやや東寄りのところで、底面にすきられたようにして検出された。これら3基の土壙については、一様に黄茶褐色砂質土で覆われていることや、接しつつ、並列していることからみて、同時存在は間違いないであろう。また、これらの土壙の機能については、土器の出土状態や床面の形状からみて窯と考えられる。ただ、土壙6の西端にある円形土壙は少し気にかかるところである。溝1は、調査区中央のやや東寄りを、南北に貫いたかたちで検出された。上端の幅0.7m・下端の幅0.1~0.2m・深さ0.5mを測り、V字溝の様相を呈している。磁北に対し、約7°偏っておりほぼ南北している。埋土は3層、とくによっては6層ぐらいに分かれ、一部に暗灰色粘土層の間層がみとめられる。しかし殆どの埋土は灰褐色ないし、青灰色系の砂である。出土遺物としては、弥生時代中期の土器片、及び後期の甕・高杯などが出土している。この溝の時期としては、中期の包含層である茶褐色土層の上面から、掘さくされていることから、後期と考えられる。ピットは全部で60余個検出している。その大部分は、茶褐色土を切って掘り込まれており、なおかつ遺物を検出したピットの80%以上が畿内第V様式期の土器を含んでいるところから、土器の検出されないピットについても、おおむねこの時期のものと見てよい。なかでも、溝1と溝2の交差するところの北側に位置する4個のピットは、直角形を呈し、またいずれも深さ0.8m以上あることから、住居址か何らかの遺構と考えられる。ちなみに、土壙6のところにあるピットは、その土壙の埋土を切って掘さくされまた、土壙6・7は溝1埋没後に掘さくされている。

(a) 古墳時代の遺構

この時期の遺構としては、住居址1基、溝及び若干のピットがある。住居址2（図版第13-b）は、調査区中央の西寄りで検出した。東辺と北辺を欠いているものの、住居の四柱穴および南辺と西辺の立ち上り部を検出した。これを手がかりに復元すると、1辺約5.5mの堅穴式住居と/or/ができる。南辺部で幅0.12m・深さ0.08mの側溝の一部を検出している。埋土は黄茶褐色砂質土で、中から弥生式土器片（畿内第III・IV・V様式）、布留式土器片・縄文式土器（船橋式）一片、が検出された。住居址中央部には、径0.5m・深さ0.12mの炉が設けられており、この炉を中心

径約4mの範囲に、焼土と炭の層が拡がっていた。なお、住居址床面下には、豊穴構築前の落ち込みが所々にみとめられた。そしてこれに関連してか、床面積の約3分の2にあたる範囲に黄茶灰色砂質土の貼り床がみられた。他に、住居址に関連するものとして、幅約0.4m・深さ約0.1mの東西方向の溝と幅約0.3m・深さ約0.1mの南北方向の溝がある。前者は芦跡から南へ延びる小さな溝と、直交してつながっている。もとは住居址の東へのびていたものであろう。後者は断面観察によると、住居址構築後に掘られており、側溝の修復と考えられる。住居址の埋土とは不明瞭ながらも塊をもっている。時期としては、床面上で検出した布留式土器片を一応決め手としている溝2は調査以中央を、東西方向に貫いたかたちで検出された。上端の幅0.7m・下端の幅0.2~0.25m・深さ0.6mを測り、断面U字形を呈している。磁化に対しては、約65°東へ偏っている。水の流れる方向は、調査区内の東端と西端で溝底差はほとんどなく、不明である。埋土は9層に細分できるが、大きさは2層~3層にまとめる。下層の青灰色砂層や茶褐色土層からは、畿内第V様式期・布留式の土器片が出土している。上層の茶褐色砂質土層からは畿内第V様式期・布留式土器・須恵器が出土している。つぎに、ピットであるが、この時期のピットとしては少なく、住居址2付近の3個のピットと土壙4付近の若干のピットだけで、まとまった遺構になるものはない。

(4) 歴史時代の遺構

歴史時代の遺構としては、井戸3基がある。井戸1は、調査区の東辺中央で検出した(図版第14-b)。井戸は、人頭大ないし、それよりやや小さめの石で構築されており、底部中央に曲物をすえたものである。内径は、上辺で1.0m、底部で0.8mを測り、現存する深さは1.5mである。掘り方は上辺で径1.75mを測る。曲物は、上端と下端にタガのまわるもので、直徑約0.4m・高さ約0.25mを測る。石組は、上方では小さな石を小口積みにして、下になるとほど大きな石を平積みにしている。曲物の掘え方は、単に井戸底の中心部を掘り下げて収めるのではなく、まず曲物を平坦な井戸底部の中心に置き、その周囲に掌大の石を曲物の高さの4分の3位まで詰め込み、そして最後に、曲物の上端に合わせて平石を敷いている。非常にていねいなつくりといえよう。埋土は暗灰色の粘質土と泥層の互層である。遺物としては、土器・陶磁器・木製品・自然遺物などがある(後述)。時期的には、瓦器窯の編年観から14世紀前半頃であろう。井戸2は、調査区の中央西寄りで検出した(図版第15-a)。井戸1と同様石組の井戸であるが、底部に曲物を使用せず、四角形に木枠組をしていった。内径は、上辺で0.85m、底部で0.28mを測り現存する深さは1.6mである。掘り方は上辺で1.6mを測る。木枠は1辺約0.4mで、高さは不明である。遺物としては、土器・陶器・瓦および祭祀に用いられたと思われる六角柱の木製品が出土している。また、掘り方からは、古代~中世に至る土器片が出土している。埋土は大きく2層で、上層が茶褐色土、下層が青灰色砂質土である。井戸の時期としては、残瓦が出土したことから、江戸時代中頃であろう。

井戸3は、調査区の西北隅部で検出した(図版第15-b)。やはり、石組井戸である。井戸1・2と違う点は、石組が二段構えになっていることと、井戸底部の水溜の所に曲物等の桶状の施設がない。内径は上辺が径0.85m、底部が径0.5mを測り、現存する深さは1.2mである。埋土は茶灰色の砂質土のみで遺物もまったく出土しなかった。おそらく、一気に埋められたのであろう。掘り方からは、古代~中世に至る土器片が若干出土している。なお、井戸の東南部の4分の1は、木製井

戸の掘り方で、切られていた。井戸内から遺物が出土しなかったため、時期決定は困難であるが、掘り方内の出土土器や、埋土が充分しまっていないことなどから、近世以降、それもごく新しい時期のものと考えている。

(B) 遺 物

上述したように、当該調査区においては、弥生時代～近世に至る遺構を検出し、それに伴って各時代の遺物が出土している。また、包含層や整地層からも、土器を中心とする遺物が多数出土している。以下、時代ごとにその主要なものを概略的に述べていくこととする。

(1) 桶文時代の遺物

住居址2の埋土から、船橋式土器が1片出土している(図版第49-b-1)。包含層からの混入と考えられる。出土した破片は、4.7×1.8cmの小片で、ちょうど刻目凸帯を有する部分である。土器自身は、大分磨滅している。胎土は茶褐色で、河内産のものであろう。この時期の土器は、鳴上郡衝跡では、最初の検出例である。郡衝跡における弥生時代の集落の成立について、一石を投じるものであろう。

(2) 弥生時代の遺物

この時期の遺物は、中期と後期に分けて記していくことにする。中期の遺物としては、土器と石器がある。土器は、各遺構や包含層から、多量に出土しているが、完形に復せるものはない。時期的には、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式期のもの(図版第48・49)が多く、まれに図版第49-b-2の破片のように、第Ⅱ様式期と思われるものもある。第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の土器の分別については、出土した土器が、すべて破片であることと、同一遺構から混在して出土していることから、あえて駆別していない。器種としては、壺・甕・鉢・高杯・水差などがある。割合としては、壺の破片が目立つ。文様としては、櫛描直線文・波状文・流水文・刻目文・斜格子文・円形文・凹線文・鋸齒文・凸帯文等で、中期の土器に通有のものである。中には、図版第48-b-1の壺片のようにヘラ記号を付したものもある。また珍らしいものとしては、鉢形土器の蓋受(図版第48-a-1)と考えられるものも出土している。これは、鉢の口縁部外側に粘土を逆U字形に貼り付け、上面を平らにし、2孔を穿ったものである。土器以外の土製品としては、壺の破片を調整して作った紡錘車が1点包含層から出土している(図版第48-b-2)。つぎに、石器では、土壙2から磨製石鎌1点、土壙4から石庖丁片1点、溝2から剥片石器1点、および中期の包含層から完形の扁平片刃石斧1点、大形石庖丁片1点・石庖丁片1点がそれぞれ出土している(図版第53-a)。磨製石鎌1は、粘板岩製で薄くて扁平な形をしているが、おしいことに基部と先端を欠いている。石庖丁はすべて、粘板岩製である。2は双孔の部分しか出土していないが、厚さ0.7cmを測り、大形石庖丁かもしれない。3は厚さ0.7cmで表面、裏面とも擦痕が明瞭に残っている。4は直刀形の石庖丁で、復元すれば18cm位の大きさになるであろう。石材はもうろく、剥離が甚だしい。扁平片刃石斧5は各面ともよく研かれており、刃部も銳利である。石材は火成岩の一類である。剥片石器6はサスカイト製で、一部に貝殻状に剥離した使用痕が認められる。このように弥生時代中期の遺物が土器だけでなく、紡錘車や石器類を含む多様なものが、セットで検出された意義は大きい。

後期の遺物で、比較的まとまっているものとしては、土壙6・7、溝1から出土した土器類があ

る(図版第26)。壺3は、土壙6の焼土壙から出土したもので、縦方向のタタキ目を有する珍しいものである。口縁部は、斜め上方へ外反し、ヨコナデ調整している。底部は突出し、外面は平滑に磨かれている。また中心部は若干凹んでいる。内面は、刷毛調整後、擦てている。色調は灰褐色。高杯1は同じく土壙6から出土したもので、浅い楔形の杯部に、短い中実の柱状部から大きく括がる裾部をもつ。裾部には4孔+1孔を穿っている。杯部内外面及び、脚部外面は、ていねいな箆磨きを施している。色調は淡褐色。小形鉢2は土壙6の壙底から若干浮いた状態で出土したもので、外面は左下りのタタキ目を有し、口縁部は、指押えをして調整している。内面は、刷毛調整後ナデ仕上げ、色調は淡褐色。壺6は、土壙7から出土したもので、縦長の球形の体部に受口気味の口縁部を有するものである。外面は、左下りのタタキ成形後、縦方向の箆磨きを施している。内面はナデ調整している。底部は突出せず、外面は、ドーナツ状に凹んでいる。色調は灰褐色。壺4も、土壙7の出土で、下半部しか遺存していない。外面は左下りのタタキ目を施し、内面は刷毛調整後、ナデしている。底部は突出している。色調は、暗灰色である。小形鉢5は、土壙7の壙底から若干浮いた状態で出土した。外面はナデ調整、内面は刷毛調整している。底部は突出し、中央部は凹んでいる。色調は灰褐色。壺(図版第27-a-1)は溝1から出土したもので、2段階に分けてつくられている。外面は左下りのタタキ目で、内面は刷毛調整後、ナデ調整している。口縁部は、斜め上方へ外反している。底部は、突出し外面に木葉痕を認める。下半部に糞の付着が若干みられる。色調は淡褐色。この他にも、溝1から受口状の壺片や、高杯が出土している(図版第49-b-3・4)。とくに後者は外面が灰色、内面が褐色で、器面状態のよい内面にはスリップがかけられていると思われる。

(3) 古墳時代の遺物

この時期の遺物としては、住居址2・溝2及び包含層から出土した土師器、須恵器などがある。蓋形土器(図版第25-10)は、天井部も丸みをおびて高く、わずかに外反気味に下方へのびる口縁部を有する。天井部と口縁部の境には、しっかりした突帯がみられる。天井部外面は、ナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整である。内面は、ナデ調整後、口唇部付近を除いて箆削り調整を施している。胎土は砂粒を多く含み、色調は灰褐色である。椀・杯とも考えられるが、口縁部の形状から一応蓋とした。伴出土器は、弥生中・後期の土器片、及び古式土師器の裏腹片で、須恵器は1片も出土していない。また、溝2から出土した小形壺(図版第49-b-5・6)は、布留式土器の中でも古相と考えられるものである。包含層から出土した高杯4点(図版第28-7・29-1・2・4)は、1箇所でかたまつて出土したもので、形態や調整に若干の違いがあるものの、法量等もほぼ等しく、規格品の如くである。色調はいずれも灰褐色である。時期的には、須恵器出現前後と思われる。壺(図版第28-8)は、さきの高杯のちかくで、出土したもので、口縁部が2段に屈曲して、短く立ち上るのが特異である。体部は球形に近く、外面が刷毛調整、内面は箆削りである。底部は欠失している。色調は淡褐色。壺(図版第29-3)は、単独出土で腹部に大きな黒斑を有する布留式のものである。外面は、刷毛調整、内面は箆削りである。広口の小形壺(同-5)は、須恵器の蓋(同-6)と同じ地点から出土したもので、外面は刷毛調整、内面は箆削りである。色調は褐色である。蓋は、天井部が丸みを帯びて、その3分の2以上に回転箆削りがみられる。口縁部と

の境には銛い穂がみられる。5世紀後半のものであろう。蓋(同-7)も包含層から出土したもので、天井部は、蓋6に比べて、扁平でヘラ削りの範囲もいくぶん狭くなっている。6世紀初頭のものであろう。この他にも包含層から、須恵器の環状把手付甕・有蓋短頸壺・土師器の把手付鍋などの破片が出土している。いずれも6世紀後半以降のものである。なお、本調査区に南接する27-D地区からは、良好な古式須恵器のセットや、多量の師楽式土器が検出されているが、27-D地区的これらの資料は、局所的なものか、あるいは北側には拡がらないものなのであらうか。

(4) 中世の遺物

この時期の遺物としては、井戸1の良好な一括資料がある。大きくは、土器類・木製品・自然遺物に分けられる(図版第27-2~10、28-1~5、50・51)。まず土器類から略述する。瓦器碗(1~4)は、小形のもので、外面は指ナデ調整後、口縁部をヨコナデしている。内面もナデ調整後、口縁部を幅1.5cmにわたって、ヨコナデしている。そして、最後に暗文をまばらに施している。底部は少量の粘土粒を輪状にこすりつけただけで、形づくりしている。全体に歪なものが多い。瓦器碗としては、終末期のものであろう。

土師器は、杯・燈明皿・小皿に分けられる。杯(3・4)は、径11.8cm・高さ3.1cmで、内外面ともナデによって調整している。内面に煤が付着している。燈明皿(1・5~9)は径10cm内外・深さ1.8cm内外で、同じくナデ調整している。底部外面のナデは粗い。煤が付着しているものと、そうでないものがある。小皿10は、径6.8cm・深さ1.7cmのいわゆるヘソ皿で、底部中央が上方へ突出している。外面は指押えて成形し、内面はナデ調整している。須恵器では、魚住産の捏鉢が数点出土している。口縁の形態からみて2形式のものが含まれている。瓦質土器は、火舎と把手付鍋の把手部がみられる。火舎は口縁部が丸く内傾するもので、口縁直下に菊印花文が2つみられる。鍋の把手は、大小2種が検出されている。その他の土器としては、瀬戸の花瓶片・陶磁片・瓦片等が出土している(図版50-a)。木製品としては、人形・曲物籠・箱・櫛の子伏木器・石帯形木製品・方形板・節板、および木炭等がある(図版50-b、51-a・b)。人形は長さ9cm・幅0.9cm・厚さ0.7cmの木片に、刀子で刻み出したものである。頭部には冠をつけ、肩部以下は面取りをして胸部に丸みをもたせ、脚部は刀子で割り裂いて作っている。曲物は造構の檣でも触れたが、井戸内からも曲物桶の底部片が出土している。籠は3本あり、いずれも片面のみを削り出して先端部をつくっている。箱は1辺14.8cm・高さ3.5cmの方形の組み物で、底部とは木釘ないし竹釘によつて接合している。櫛の子伏木器は長さ10.2cmでくびれた部分に點目を残す切断面がある。石帯形木製品は不定8角形で、周辺部に釘穴が數ヶ所みられる。方形板は、合計8片程出土しており、柾目板が多い。節板は2片出土しており、うち1つは、表裏に黒漆塗りがみられる。木炭は少なからず出土している。それも偶発的にできたものではなく、燃料用として、つくられたものである。自然遺物としては、桃の種・梅の種・自然木・および、自然木の焦げたもの、松笠・木葉などがある。

近世の遺物

この時期の遺物としては、井戸2から出土した備前焼の摺鉢片・棧瓦片・急須・竹製杓・墨書のある祭祀用の木柱、および棒状の木製品がある。(図版第28-6、52-a・b)

摺鉢は底部を欠失しているものの、備前焼特有の暗褐色の色調を呈している。外面は横方向のナ

デで仕上げ、内面は縦方向の粗い櫛目が密にみられる。口縁部は下方へ厚く肥厚させて成形しており、内面には松の押印がみられる。片口部分は指で押し出して作り出している。

急須は底部やや弧かる鉤錐状を呈し、体部中位から上向きの注口が付いている。肩部には1対の把手取り付けのための突起を有する。この突起は、はじめ一つに作ってあったものを刀子で二分して貼りつけている。外面は彫刻刀のようなもので、細かく刻目を全面に彫りつけている。そして、白粘土で、梅か橘の下絵を描き、そのうえに、緑・黄・紫で絵付けしている。注口を中心にして、左右では絵柄が若干異っている。内面は下半部に釉薬がみられる。蓋と把手はすでに失われている。色調は茶灰色。古曾部焼と系譜的なつながりはないようである。

井戸祭祀用の木柱は、現存長3.3cm・太さ4.4cmで、断面6角形を呈す。頂部は中心部をやや高くして、求心状に三角形の面を6単位面つくっている。また、縦方向の各面も数ヶ所に刃物で区切りをつけて単位面をつくっている。墨書きはこれらの単位面に1字～2字を記している。頂部には右回りに「標」・「空」・「風」・「火」・「水」・「地」と記している。縦の各面には、上から、「義」・「太」・「公」・「在比」と記し、それ以外は腐食のため一部を除いて、殆ど判読できない。例えば、頂部の「火」の面に対応する縦の面で「從口」、「水」の面に対応する縦の面で「口無」と読めるぐらいである。(森田)

11. 北4地区の調査(図版第59)

郡家本町926番地の3にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。清福寺方面から郡家本町の集落の中を通り道路に面している。この地域は民家が密集しているため、これまで充分な調査を実施することができなかった。今回、個人住宅改築の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ発掘調査を実施することになった。

遺構・遺物

届出地の中央部に幅約2m・長さ約12mのトレンチを設定して調査を行った。約0.4mの盛土を除去すると、黄灰色土(0.1m)、暗褐色土(0.3m)と堆積し、地山は砂礫を多く含む黄褐色土である。遺構は数個の柱穴を検出したが、形状や方向に統一性が無い。柱穴内から古墳時代の土器・須恵器が出土している。(横木)

12. 72-F地区の調査

高槻市郡家新町54にあたり、小字名は茶屋之前と称する。現状は畠地であるが、このたび、賃貸住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘調査届が提出されたため、文化庁・大阪府教育委員会等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。当該地は、嶋上郡衙跡と関連深い、郡家今城遺跡の北方約80mに位置し、郡家今城遺跡の拡張を確認するための調査である。調査は重機で幅35m・長さ12mのトレンチを設けておこなった。層序は耕土(0.2m)・整地層(0.3m)・灰褐色粘土層(地山)、で遺物包含層は検出できなかった。トレンチ東部で、地山面上に1辺0.5mの方形ピットと径0.8mの円形ピットを検出し、ピット内は灰色砂層で、遺物もなく極めて新しい掘り込みと考えられる。また、郡家今城遺跡からは、これまでの調査によって、旧石器時代の遺物を多

数検出しているところから、旧石器資料を探索したが、得られなかった。なお、灰褐色粘土層を掘り下げる際に、ところどころで灰白色の火山灰を認めた。（森田）

13. 7-B・C区の調査

高槻市清福寺町781-8番地にあたり、小字名は清福之内と称する。史跡、鶴上郡衙跡の北東部に位置し、阿久刀神社の東方約80mのところである。北側は芥川の土堤と接している。現状は宅地であるが、このたび宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

(A) 遺構（図版第16・17）

調査は残土の都合で重機を使用しておこなった。層序を列挙すると、表土（0.2～0.3m）、茶灰色土層〔整地層〕（0.1～0.2m）、暗褐色土層〔遺物包含層〕（0.3～0.4m）、茶褐色疊土層〔地山〕となる。地山面の高さは標高約17mである。

(1) 弥生時代の遺構

この時期の遺構としては、住居址2基と若干のピット及び平面がU字形の溝がある。住居址1は調査区西辺の中ほどで検出された。住居址の大半は調査区域外にあるため、規模については明らかでない。側溝は東側幅0.2m・深さ0.08m・南側幅0.35m・深さ0.15mを測り、南側が少し大きくなっている。埋土は暗褐色土で遺物包含層の十質と同じである。ただ、床面から5cmの高さのところに、部分的ではあるが薄く炭の層がみとめられ、埋土を識別することが出来る。住居址の遺物としては床面や埋土から畿内第V様式期の十器片（甕・高杯等）が多く出土している。また、住居址周辺部からも同時期の土器が多数検出されている。住居址2は、調査区の南辺中央で検出されている。遺構の残存状態はあまりよくなく、住居址北辺の側溝と東の壁面の立ち上りの一部を検出したのみで、規模等については不明である。ただ住居址の中央部とおもわれるところで、径約0.4m・深さ約0.1mの軽妙状の凹みがみとめられ、それを手がかりに復元すると、1辺4.1m前後の方形住居址に復元できる。また北辺側溝は幅0.16m・深さ0.05mを測り、東辺の立ち上りは、約0.07mである。埋土は、遺物包含層である暗褐色土とまったく同じで、区別はつかない。遺物としては床面からほぼ完形の斐形十器1点が出土している。ピットは、調査区西北部の若干希薄なところをのぞけば、ほぼ全城に散在している。ところで、これらのピットからの出土遺物は極めて少く、時期決定は非常に困難である。さらには埋土の状態や、タキ目のある土器片を手がかりにして、弥生時代のピットを選定しても、それらが組み合って遺構をなすまではまとまっていない。つぎに、調査区南辺中央部で検出した平面U字形の溝についてみてみる。この溝は一応周溝状を呈しているが、南側の部分が調査区域外にあるため、全体の形状は不明である。幅約0.45m・深さ0.07～0.3mを測り、浅いところと深いところがみられた。浅いところから、弥生式土器片(V)、布留式土器片、須恵器片等が出土している。溝の時期としては、住居址2がこの溝を切っているところから、第V様式期以前の遺構と考えられる。また、この遺構の性格としては、当初、周溝墓かとも考えたが、平面形が不定形なことや溝自身がしっかりした遺構でないことなどから、積極的に認めるまでには至っていない。

(2) 古墳時代の遺構

この時期の遺構としては、住居址 2基がある。2基とも調査区南西隅で検出された。住居址 3は住居址の北東部が検出され、残りの部分は調査区域外である。したがって、大きさについては明らかでない。しかし、4本柱のうち北側の2本を検出していることから、1辺約4.1mの方形住居址に復元することが可能である。側溝は幅約0.12m・深さ約0.18mである。床面は遺構面の高さと比べて約0.1m低くなっている。埋土は暗褐色土で、出土遺物としては、混入物と考えられる弥生式土器片(M)若干と、布留式土器の古い段階のものが多く検出されている。布留式土器の器種としては、壺・甕・高杯などがある。また、住居址東部の南壁際から東へ約1mのところで、同時期と考えられる小形鉢や高杯が出土している。住居址 4は住居址 3と重複するような形で検出され、住居址 3と同様、大部分は調査範囲外にある。大きさとしては、住居址 3とあまり変わらないであろう。側溝は幅約0.2m・深さ約0.05mである。埋土は暗褐色土である。またこの住居址は火災で焼失したとみられ、住居址内には厚く焼土と灰が堆積していた。出土遺物としては、埋土から布留式土器(甕)のほぼ完形品が、また焼土・炭層から弥生式土器片(V)や布留式土器片が検出されている。

弥生時代から古墳時代にかけての住居址は、本調査区の西側や南側の調査区から多数検出されており、今回検出した住居址はこの時期の集落の北東部を限るものと考えられる。

(3) 中世の遺構

この時期の遺構としては、方形土壙(図版第17-b)と井戸(図版第18-b)が検出されている。方形土壙は、調査区の東南部で検出され、一部は調査区外にある。1辺約4.5mの隅丸方形で、深さ0.7mを測る。掘り込みは、遺物包含層である暗褐色土層上面からみとめられた。底部はフラットに近く、傾斜面も比較的緩やかである。埋土は3層に分れ、上から淡茶褐色砂質土(0.5m)・灰白色粘質土(0.15m)・茶灰色砂質土(0.05m)である。淡茶褐色砂質土は、あまりしまっておらず、一気に埋められたものであろう。茶灰色砂質土中には、多くの炭や焼土が混っている。また土壙の南西部の斜面を中心にして、同じく茶灰色砂質土中に、スサを混えた窓壁状の破片が多く散乱していた。これらが方形土壙と関係のあることは確実だが、壁面や床面として遺存していたものはなかった。また、この土壙で、継続的に何かを焼成していたと考えられるほど、炭や煤も多くなく、土壙の機能をにわかに考え難い。出土遺物としては、須恵器片・瓦器片・土師器片及び、鉄釘片等がある。

井戸は、調査区の西北部に位置し、掘り方の一部は調査区域外である。人頭大ないし、それよりやや小さめの石で構築された円形の石組井戸である。井戸底部には木製の桶がすえられていたと思われ、その一部と考えられる木片が壁面に縦りついていた。内径は、上辺で0.75m・底部で0.65mを測り、現存する深さは1.3mである。掘り方は二段掘りで、上辺で径2.5m、途中の屈曲部で径1.75mを測る。掘り方の屈曲部を境にして、その上方では石積みの方法が異なっている。すなわち、上方で小口積になっており、下方では大きい石を平積みにしている。埋土は茶褐色土で、遺物としては上層から土師器の小皿片・羽釜片・弥生式土器片、下層から、須恵器の鉢底部・弥生式土器片等が出土している。また掘り方の埋土からは多量の弥生式土器片(V)・布留式土器片・須恵器(6世紀)・瓦器・羽釜片・三足土器などが出土している。とくに弥生式土器は掘り方の上層から固

まつて出土したことから、井戸構築の際、包含層から出土した土器をまとめて廃棄したものと考えられる。この井戸に対応する遺構としては、先の方形土壙が考えられるが、この時期の建物遺構は検出されなかった。

以上記した遺構の他に時期不詳の土壙や方形のピット類がある。

土壙は、調査区の中央部から南にかけて4基検出された。土壙1は、長方形で長さ2.0m・幅1.0m・深さ0.2mを測る。土壙2は、ほぼ円形で、径1.6m・深さ0.25mを測る。土壙3もほぼ円形で、径1.2m・深さ0.2mを測る。中央部は2段掘りになっている。土壙4は、不定長方形で、長さ1.8m・幅0.8m・深さ0.2mを測る。土壙5は、梢円形で、長さ1.4m・幅0.9m・深さ0.05mを測る。いずれも、埋土は、淡茶褐色土ないしは茶褐色土である。また、土壙1・2・4・5からは全く遺物は出土しなかった。土壙3も若干の土器片が出土したが、時期決定はしがたい。つぎに調査区北東部に散在する方形ピットであるが、混入遺物として、弥生～古墳時代の土器片をみとめるものの、時期決定ができない。おおよそは古墳時代以降のものであろう。

(B) 遺物（図版第30・31・55）

本調査区においては、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が多く出土している他、中世の遺物も若干出土している。以下略記する。

(1) 弥生時代の遺物

この時期の遺物は、住居址1、住居址2、及び住居址1の周辺部から出土している（図版第30・31・55-a）。壺1（図版第55-a）は、住居址1の床面から出土したもので、口縁部のみ遺存している。瓶口縁端部下端に、粘土紐を貼りつけ、口縁端部を形成している。端部は、櫛描波状文と、竹管文付円形浮文で飾られている。色調は暗灰褐色。やや砂質。高杯2も住居址1の床面から出土しているが、据部のみである。色調は褐色。高杯（図版第30-1）は、住居址1の埋土から出土している。杯部は楕円形の底部に大きく外反する口縁部がつき、端部は皿をもっている。脚部は短くて、中実の柱状部に大きくひらく裾部がつく。しかし、裾部の大部は、すでに失われていた。色調は灰褐色。また、この他にも埋土から、二重口縁壺・甕・有孔鉢などの破片が少なからず出土している。甕（図版第30-2）は住居址2の床面から出土したもので、縦長で球形の体部に突出した平底と上方へ立ち上る口縁部を有する。外面は左下りのタタキ目を有し、接合部はナデ調整している。内面は刷毛調整後ナデ調整している。口縁部は内外面とも刷毛調整後ヨコナデしている。胸部下半には煤が付着していた。色調は灰褐色。鉢（図版第31-1）は住居址2の埋土から出土したもので、外面は左下りのタタキ目を有し、内面は風化している。口縁部はわずかに屈曲して外反している。色調は淡褐色。

(2) 古墳時代の遺物

この時期の遺物としては、住居址3・4および包含層から、布留式の古い段階の土器が出土している。住居址3の埋土からは、壺・甕・高杯・小形壺・小形器台・台付椀等の破片が多く出土している（図版第55-b）。いずれも砂粒を多く含み、器壁が薄い。色調は褐色系。高杯3・小形鉢4（図版第30）は、住居址3の東外辺の地山面上から出土している。小形鉢は内外面とも丁寧に造りこまれており、胎土は極めて精良である。色調は赤褐色。高杯は杯部の屈曲部が段をなさず、底部

から口縁部へなだらかに移行している。柱状部は中空で、裾部は欠失している。住居址4の埋土から、第5(図版第80)が出土している。胴張りの珠形の体部にやや内湾気味の口縁部がとりつく。端部内面は若干比高している。外面は刷毛とナデによって調整し、内面は箆ケズリである。色調は淡褐色。この他に包含層から6世紀前半頃の須恵器片が若干出土している。

(3) 中世の遺物

この時期の遺物は極めて少なく、井戸や方形土壙から若干の瓦器片や三足土器片が出土しているだけである。また包含層からも、瓦器陶の破片が1点出土しているのみである。(森田)

14. 17-D・H地区の調査

清福寺町806番地の1にあたり、小字名は清福之内と称する。現状は水田で、周辺部のこれまでの調査では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている。今回、自家用車庫建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

(A) 遺構

調査の範囲は幅7m・長さ36mで、重機を使用した。約0.2mの耕土を除去すると、黄灰色土(0.3m)・黄褐色土(0.3m)・暗褐色土(0.5m)、以下地山となる。各層とも砂礫が混入しており、芥川の氾濫を想像することができる。黄灰色土を除去すると中世の小柱穴が若干認められたが、まとまりを欠く。黄褐色土・暗褐色土は古墳時代から奈良・平安時代の遺物を包含している。地山の淡褐色土には挿入の跡が含まれており、調査区の南部と北部では、特に顕著に認められた。遺構はこの跡を避けて調査区の中央部を中心に検出した。検出した遺構には溝・土壙墓・柱穴がある。溝は調査区の西壁に沿って北端から中央部にかけて検出された。幅0.6m・深さ0.3mを測り、溝内から各時期の須恵器・土師器が出土した。土壙墓は3基検出されているが、そのうち2基は調査区南部の跡が多く含まれている地区に位置している。1号土壙墓は跡の少ない柱穴群のなかに位置し、方形で長さ1m・幅0.8m・深さ0.25mを測る。2号土壙墓もほぼ方形で長さ1.3m・幅0.8m・深さ0.3mを測る。3号土壙墓は東壁に接しているため長さは不明であるが、小判形を呈し幅0.8m・深さ0.2mを測る。土壙墓内からはほとんど遺物は検出されなかったが古墳時代のものと考えられる。柱穴はおむね円形を呈する。直径0.2~0.4mを測るが建物跡としてのまとまりはない。

(B) 遺物(図版第56)

土師器・須恵器・縁釉陶器などが出土している。

土師器には小形壺とやや大形で長脚の壺がある。小形壺は広義の布留式に属し、口縁端内側がわずかに肥厚する。最大腹径は体部の上位にあり、尖底状の丸底である。内面は頸部のやや下方から箆削りされている。外面は風化が著しいが、刷毛調整とみられる。口径14cm・器高20cmである。

長脚の壺は口径19cm・器高31cmのものと、口径20cm・器高33cmのものがある。

いずれも底部は平坦な面をもち、外面は細かい刷毛調整、内面は底部付近を粗く箆削りする。

須恵器は口縁のたちあがりが比較的高い杯と高台の付く杯がある。

埴輪質で断面橢円形を呈する土管状のものが出土している。断面の長径 15cm・短径 8cm・厚さ 1.5cm である。外面は縱方向の細かい刷毛調整が施される。

縁釉陶器は碗・皿が出土している。碗は底部が蛇の目、平底、貼りつけ高台のものがある。蛇の目のものは胎土は硬質、灰色である。見込みには施釉前の重ね焼痕がある。釉は淡緑色で底部外面には施されない。平底の胎土は軟質、淡褐色で淡黄緑色の釉が全面にかかる。貼りつけ高台のものには二種がある。ひとつは胎土が軟質、淡褐色で、高台内に糸切り痕がのこる。また、高台端内側には段がある。もうひとつは、高台が高く、胎土は硬質、灰色で釉は淡緑色である。やはり、高台端内側に段がある。皿は貼りつけ高台がつき、高台内に糸切り痕がのこる。また、高台端内側に段がつき、胎土は軟質・淡黄褐色で釉は淡黄緑色である。

その他磁石が二点出土しているが、時期は不明である。(橋本)

第3章 まとめ

史跡・鳴上郡衙附寺跡の周辺における今年度の発掘調査は、国庫補助事業 8 件、自己負担事業 6 件の合計 14 件に達する。いずれも、個人住宅の増改築ならびに宅地造成工事によるものである。

今年度の調査は、史跡指定地北東部の隣接したところに集中したため、都衙成立前の様相について、多くの新しい知見を得ることができた。しかし、このように史跡指定地に隣接した場所にもかかわらず、都衙中枢部の様相について、十分に把握するまで至っていない。一方、山陽道の南に存在した古墳群—川西古墳群—では今回もまた、多数の古墳跡を検出するなど、貴重な資料を得ることができた。調査における多くの成果から判明した新たな知見について、各時代別に略記する。

旧石器時代については、7-C・G 地区ならびに 75-H 地区から、少量ではあるが、国府型ナイフ形石器や削器などが出土している。とくに、7-C・G 地区では石核なども出土している点、この時期のキャンプ地があったと想定していいだろう。

縄文時代については、17-P、18-M 地区の遺物包含層中から晩期の船橋式土器片が 1 点出土している。また、75-H・L 地区では、サヌカイト製の石鏃が 2 点出土した。これまでと同様、遺構については不明である。

弥生時代については、これまでの調査でも、中期の方形周溝墓が確認されており、この時期の墓地が明らかになっていたが、これらの墓地は直接的にも、間接的にも集落と結びつくまでに至っていなかった。今回、とくに注目すべき点は、17-P、18-M 地区で出土した遺物や遺構があげられる。畿内第Ⅲ・N 様式期の壺・鉢・高杯・水差しや壺片を利用した筋輪車などと共に、石庵丁・磨製石器・扁平片刃石斧も出土した。さらに、円形土壙も確認されたところから、芥川西岸線のどく限られた範囲に、中期の集落が推定できるようになった。後期については、調査地区のほぼ全域で遺構・遺物を認めるが、遺存状態は良くない。その中で、多数の堅穴式住居址を検出したことは、これまでの調査結果でも明らかのように、後期後半の時期に至って阿久刀神社周辺を起点に、山陽道との間の広大な範囲に集落が形成されたことを物語っている。そして、この集落が古墳時代に至って、発展的に維持・展開する事実は、この時期が一つの歴期であることを示すものである。

古墳時代についても、その初頭から後期に至る住居址を多数検出した。弥生時代後半から続く集落立地に大きな変化はみられないが、この時代の墓域として明らかとなってきた川西古墳群では、新たに、円墳（前期）・前方後方墳（後期）・方墳（後期）を検出した。とくに、前期に属する円墳には、三本の濠の突出をみとめたことは注目すべきことである。

奈良時代～平安時代については、16-L・O・P地区において、井戸と共に、多数の掘立柱建物跡を検出している。建物群は、柱通りの方向や重複関係から、少なくとも、6回の建て替えがあったと思われる。それも、8世紀から10世紀後半にわたって居住していることがわかる。これらの建物跡は、その面積によって大きく2分され、大規模なものでは南北に柱通りを行するものである。また、17-D・H地区から多くの綠釉陶器片が出土したことは注視されてよい。今後、この周辺での調査において解明されよう。

鎌倉時代については、16-L・O・P地区で、1単位の屋敷地を検出したが、建物配置については明らかにできなかった。しかし、屋敷地内の井戸は、底に曲物を据えた石組井戸で、この時期に多くみられる形態を示している。また、井戸内からの出土遺物はあまり多くはないが、17-P、18-M地区で検出した井戸から、長さ9cmの人形と1辺14.8cm、深さ3.5cmの箱が出土している。共伴する瓦器碗から14世紀前半頃と考えられ、注目すべきことである。なお、この時期の集落立地は、奈良時代から平安時代の集落地とはほとんど重複せず、芥川西岸縁辺部に限られ、現在の清福寺村と重なるものと考えられる。

以上のことから、これまでの調査結果を総合すると、郡衙成立前から廃絶に至る集落立地およびその構成について、芥川西岸を中心に広がる地域の重要性が、ますます増大してきたといえよう。（角成・大船）

図 版





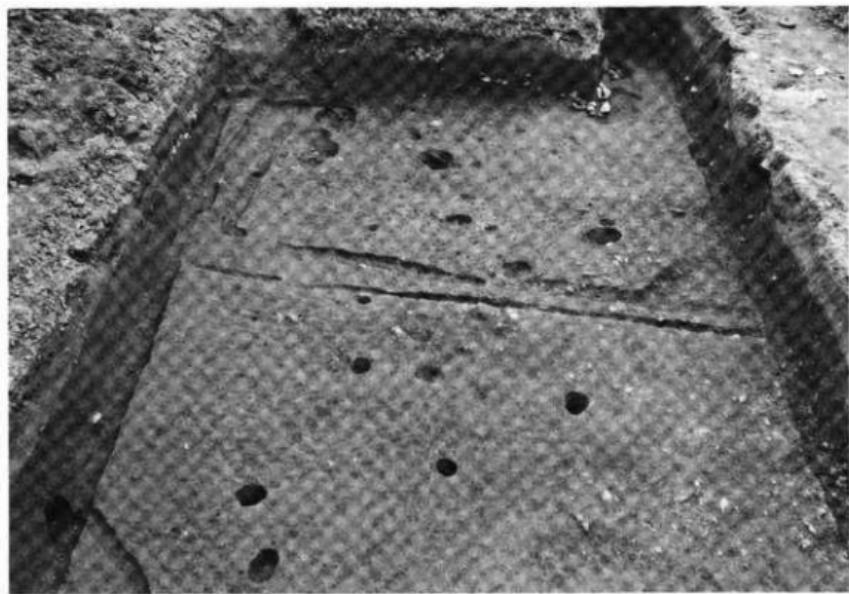
調査位置図



鳥上郡衙跡



a. 7-C・G地区 南調査区（北側から）



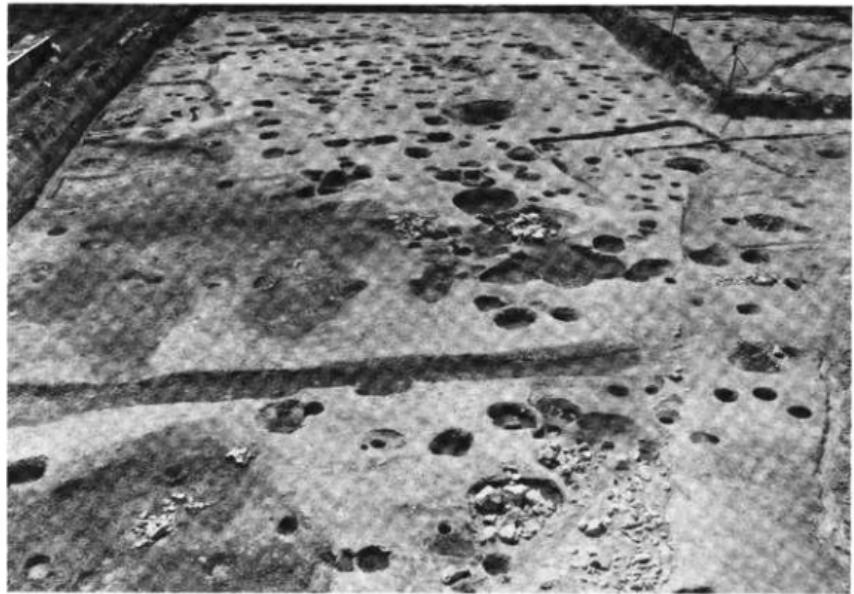
a. 7-C・G地区 北調査区（北側から）



a. 16-L・O・P地区 北区(南側から)



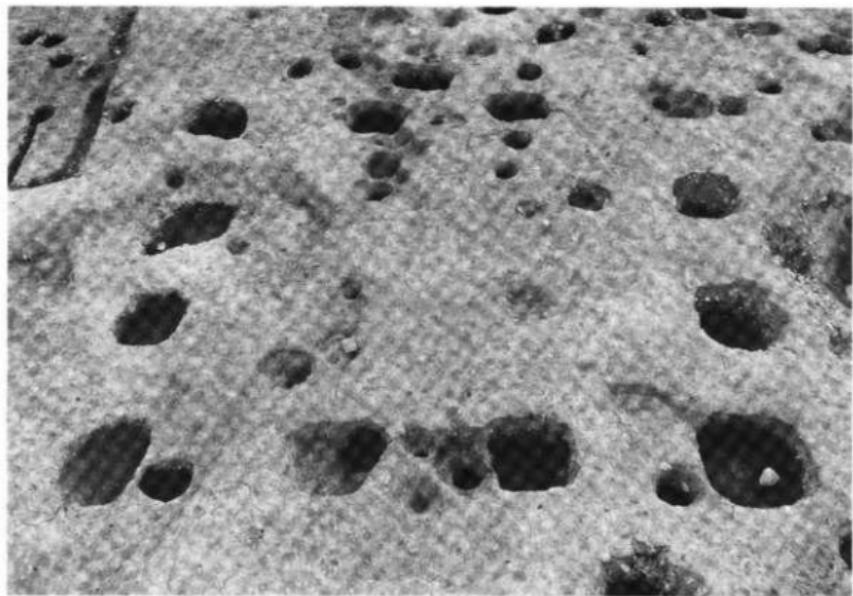
b. 16-L・O・P地区 北区(北側から)



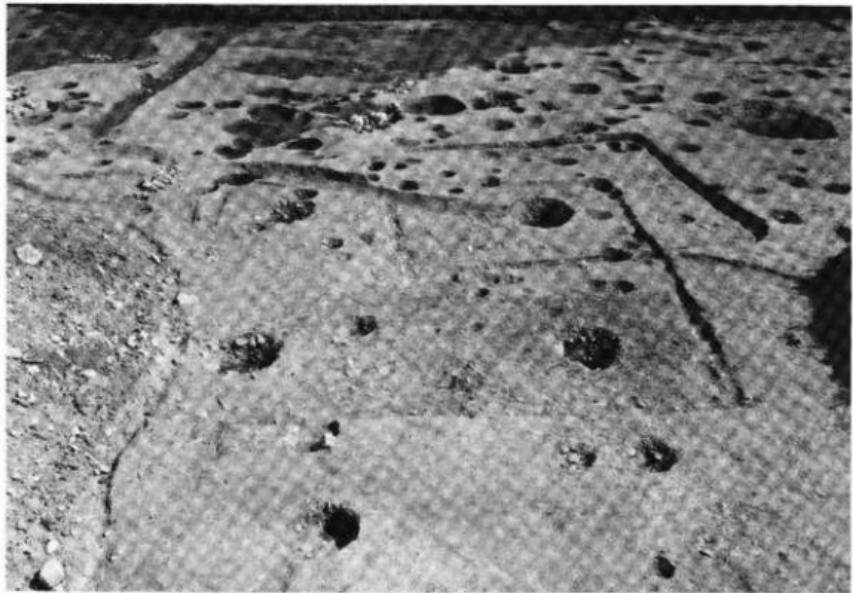
a. 16-L・O・P 地区 南区（東側から）



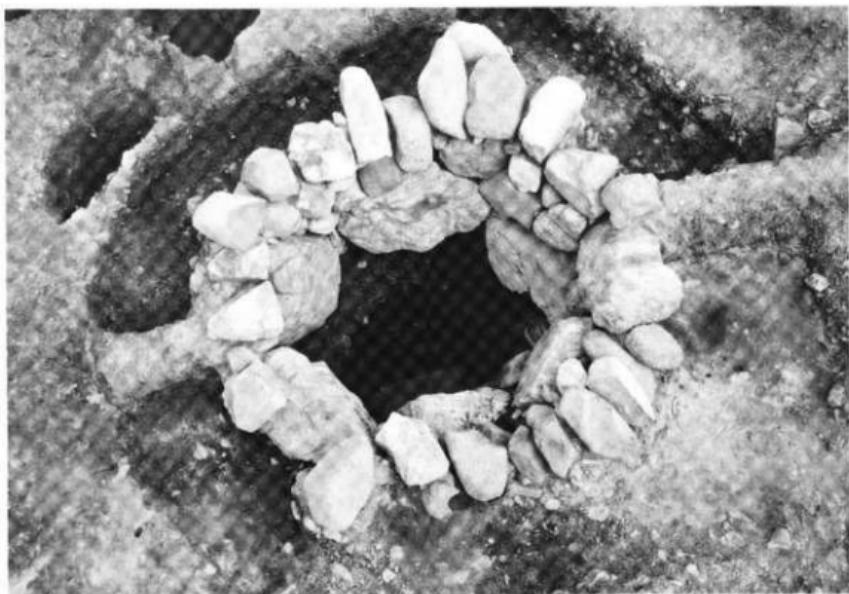
b. 16-L・O・P 地区 南区（西側から）



a. 16-L・O・P地区 建物址13(東側から)



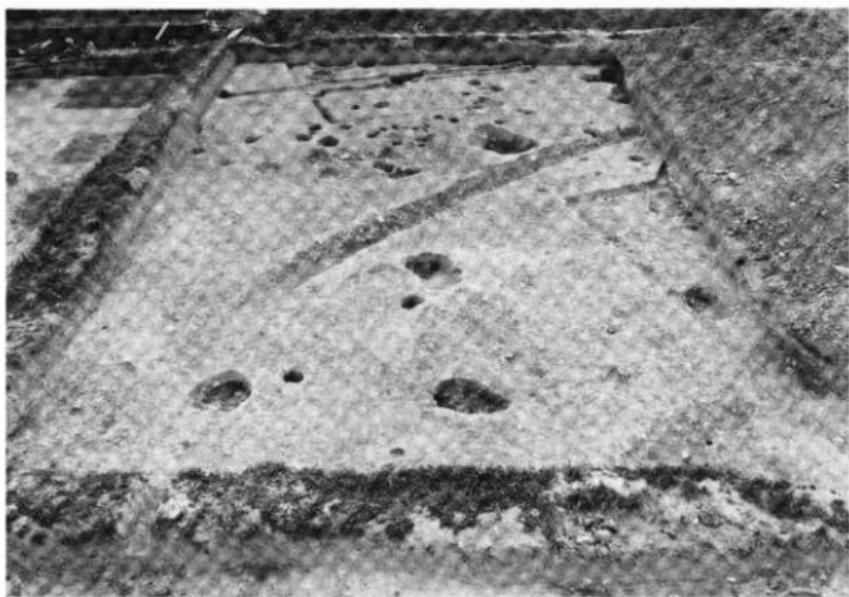
b. 16-L・O・P地区 住居址11・12(北側から)



a. 16-L・O・P地区 石組井戸（西側から）



b. 16-L・O・P地区 井戸2（西側から）



a. 16-K・O地区 全景(東側から)



b. 16-K・O地区 全景(南側から)



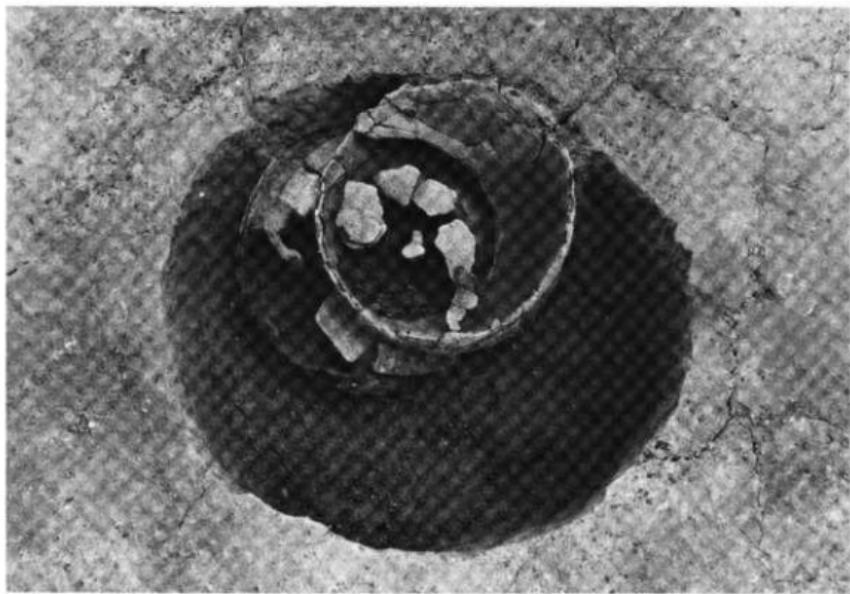
a. 75-D・H・L・P地区 北区（南側から）



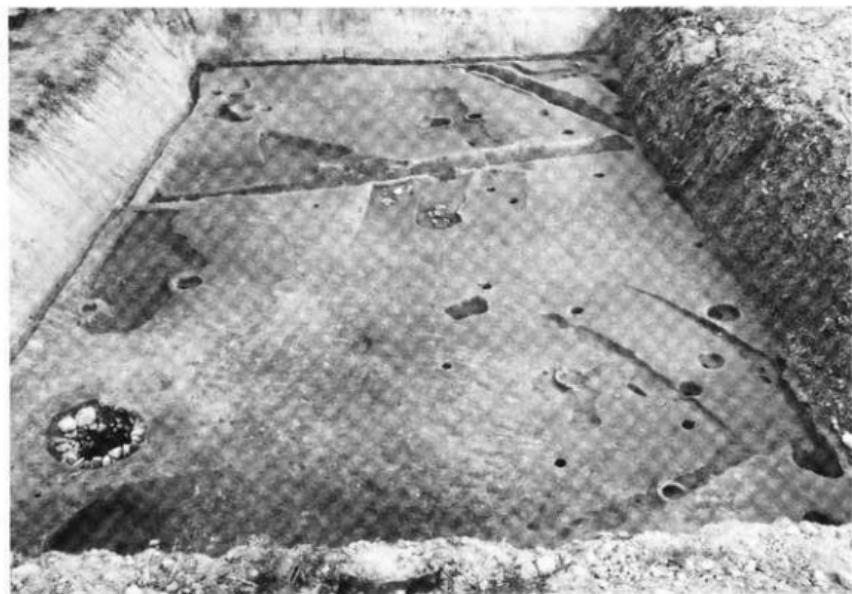
b. 75-D・H・L・P地区 北区（北側から）



a. 75-D・H・L・P地区 南区(北側から)



b. 75-D・H・L・P地区 土器棺(北側から)



a. 17-P, 18-M 地区 北区（西側から）



b. 17-P, 18-M 地区 南区（西側から）



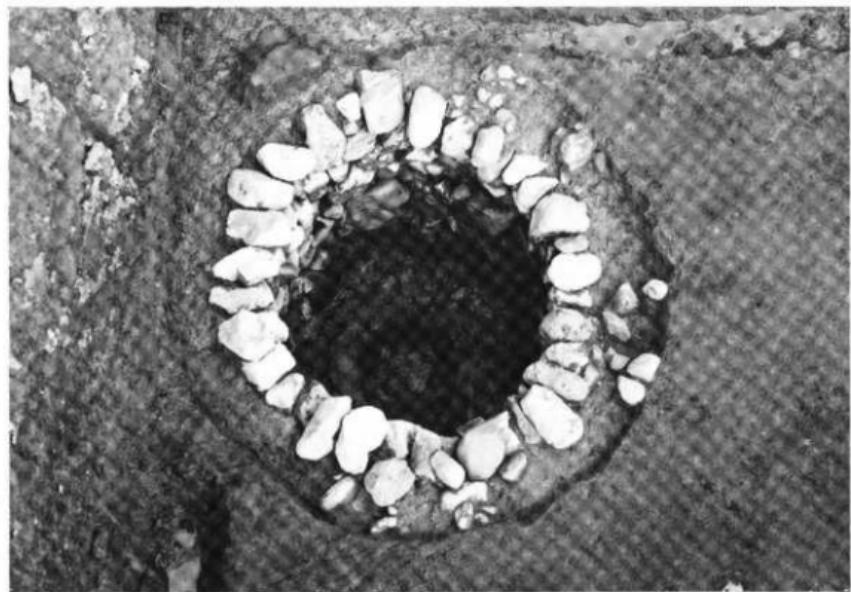
a. 17-P, 18-M地区 住居址1(西側から)



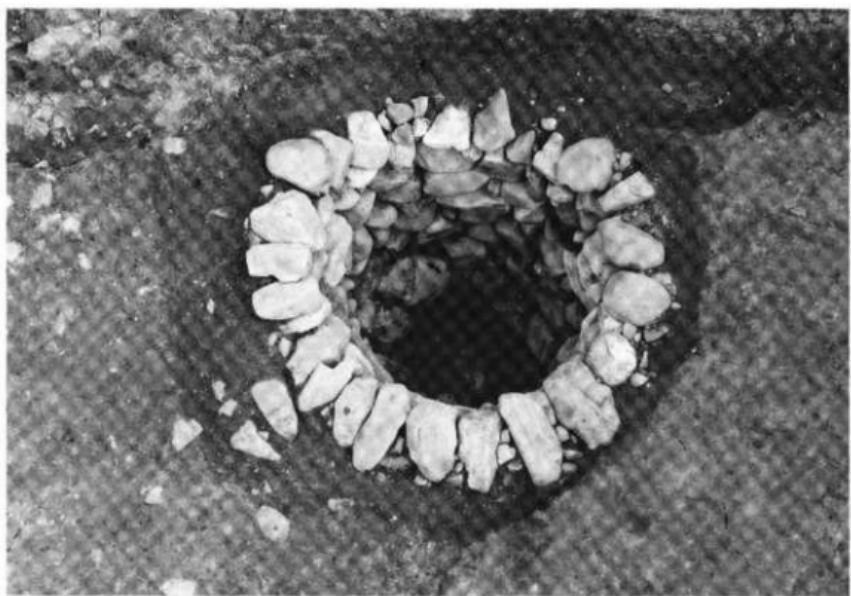
b. 17-P, 18-M地区 住居址2(東側から)



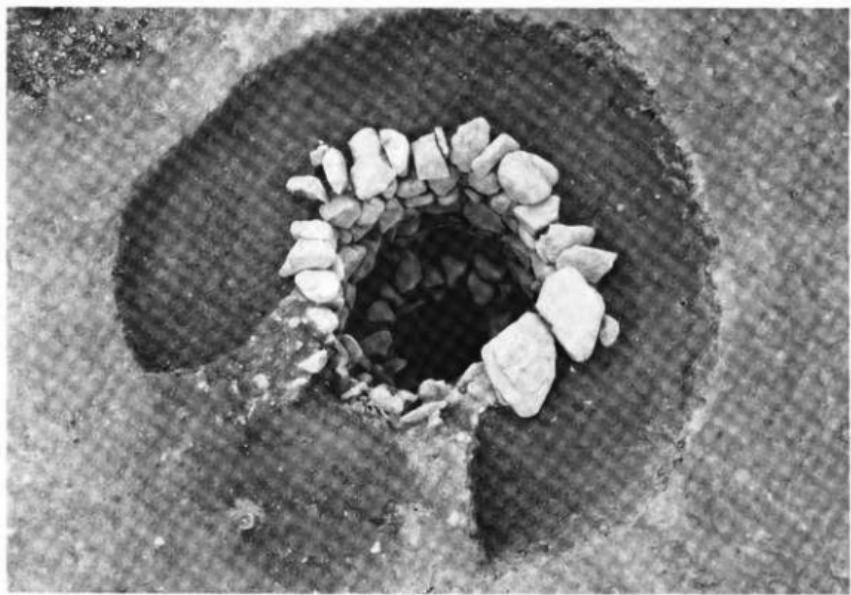
a. 17-P, 18-M 地区 土壌 5・6・7 (北側から)



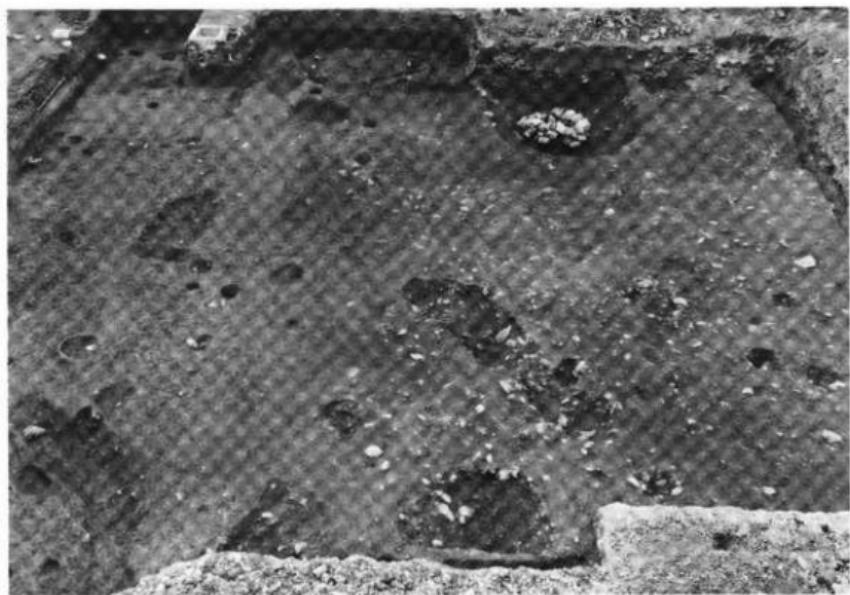
b. 17-P, 18-M 地区 井戸 1 (西側から)



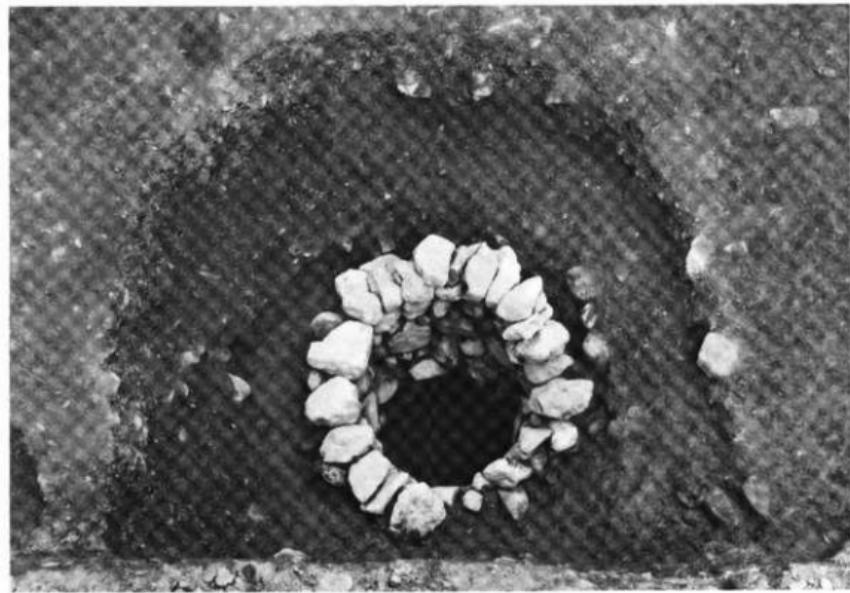
a. 17-P, 18-M 地区 井戸 2 (南側から)



b. 17-P, 18-M 地区 井戸 3 (南側から)



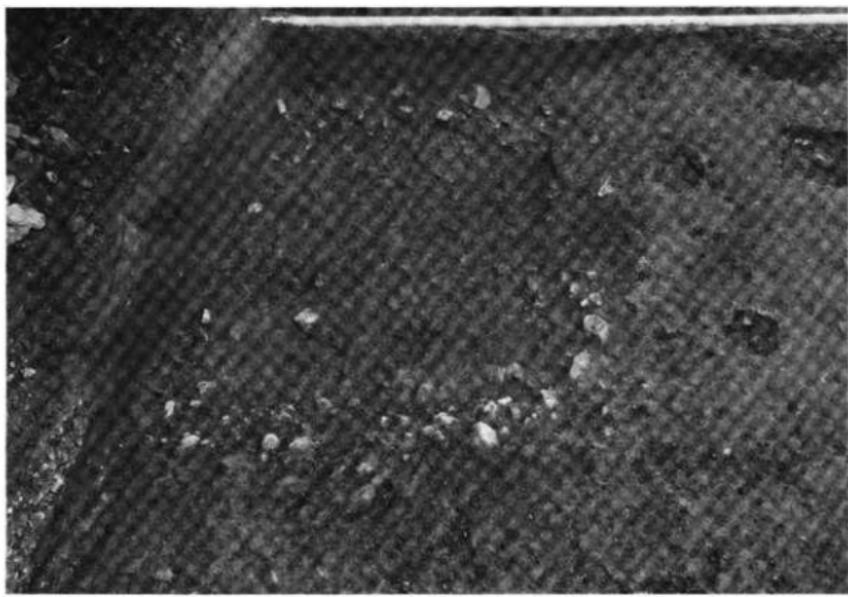
a. 7-B・C地区 西区(東側から)



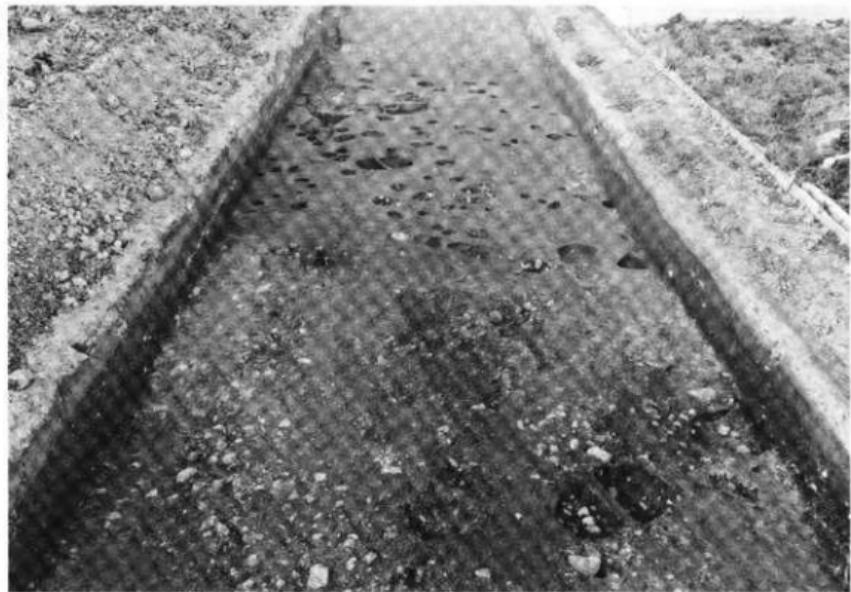
b. 7-B・C地区 井戸(西側から)



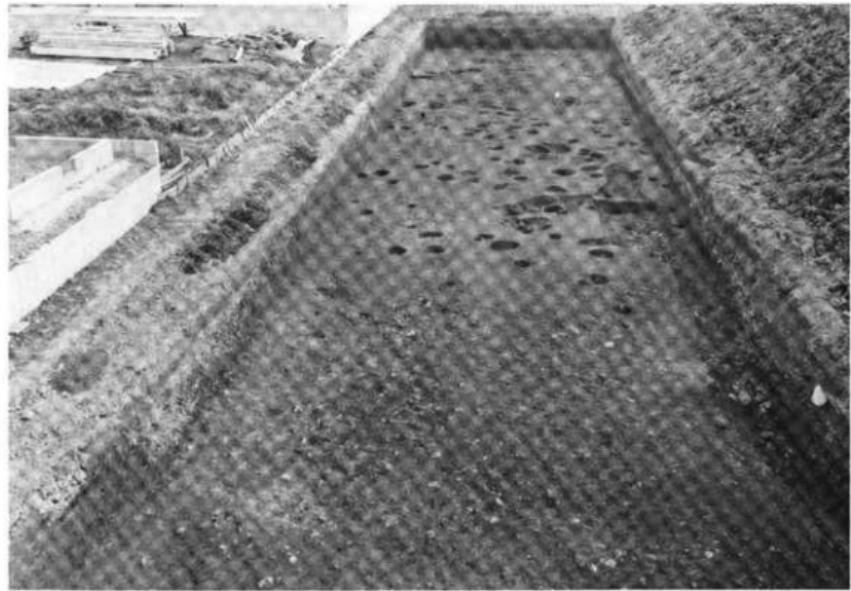
a. 7-B・C地区 東区（西側から）



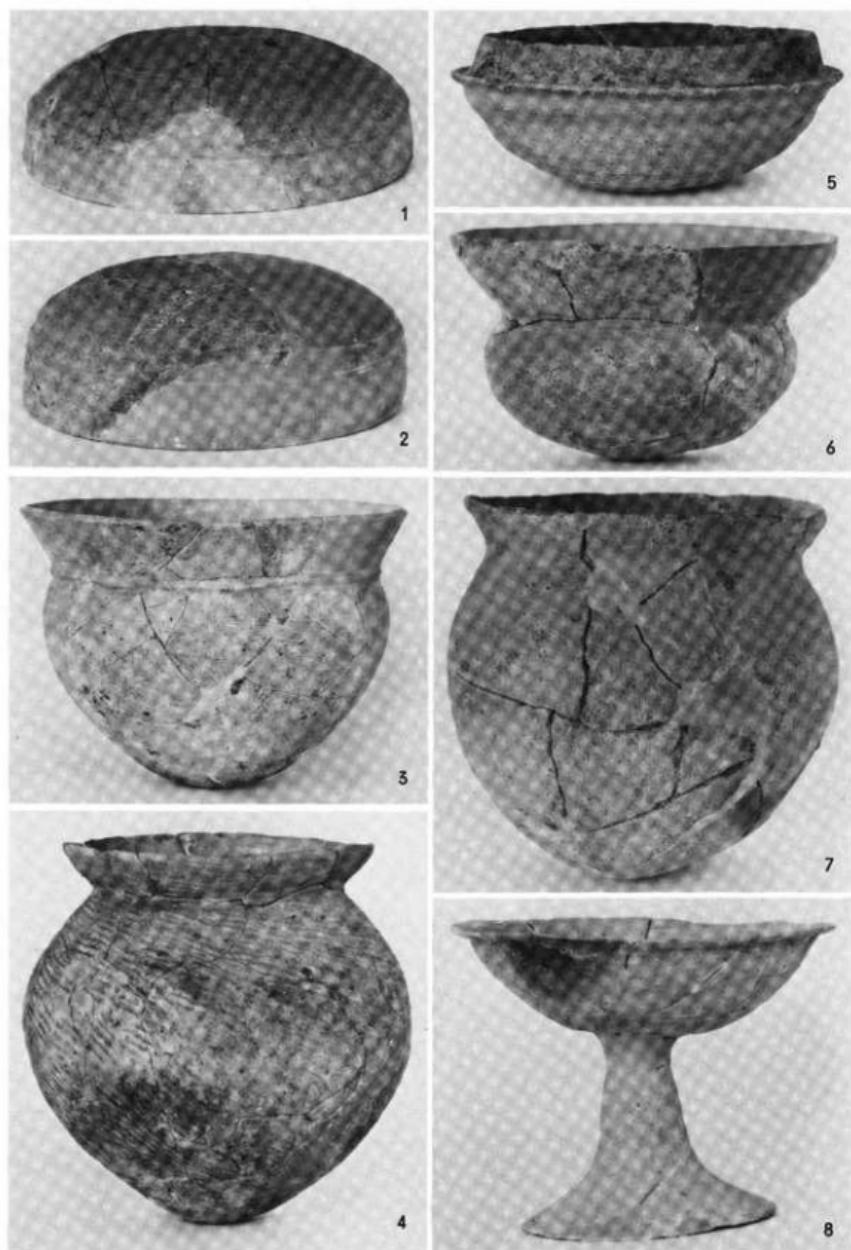
b. 7-B・C地区 方形土壌（北側から）



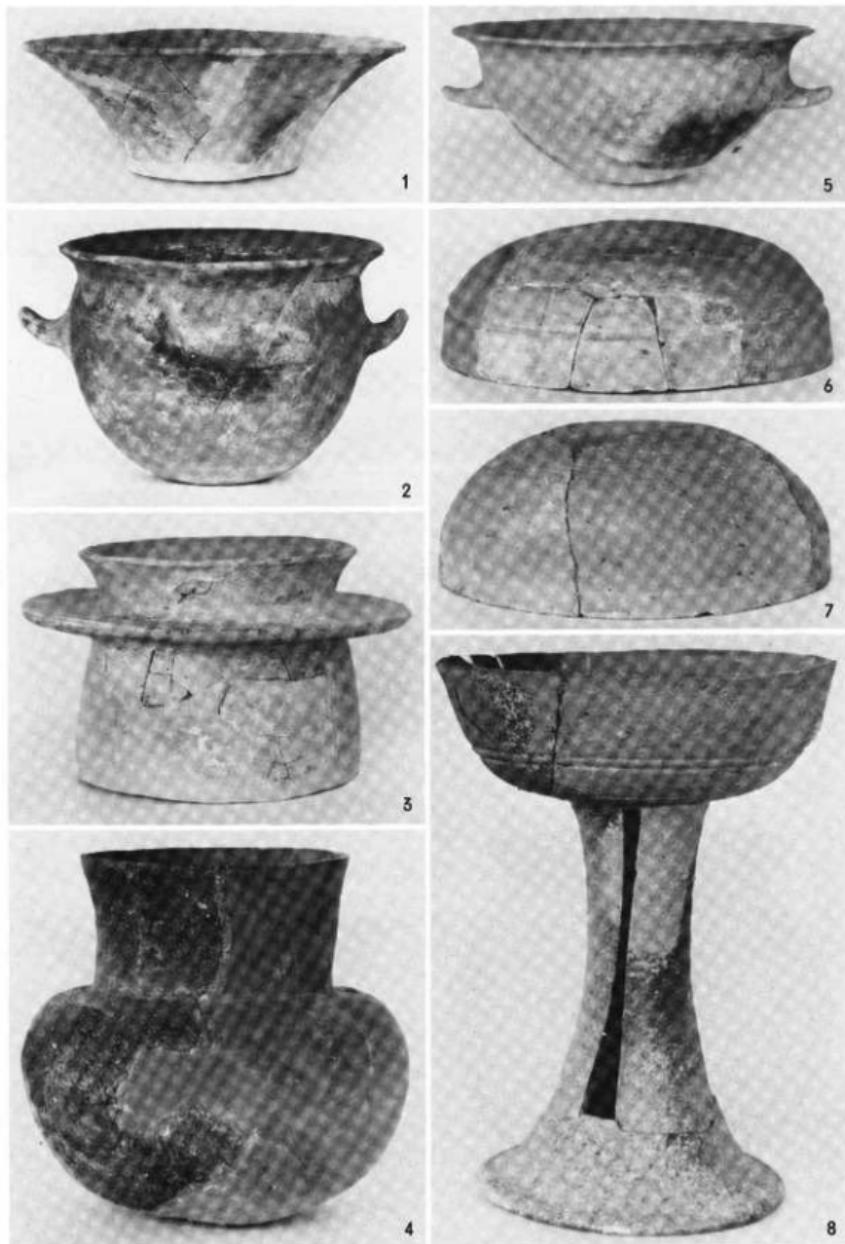
a. 17-D・H地区 全景(南側から)



b. 17-D・H地区 全景(北側から)



7-C・G地区 包含層(1・2), 16-L・O・P地区 住居址12(3・4), 住居址4(5)
住居址10(6・7), 住居址11(8) (1)C-15.8, (2)C-14.3, (3)C-31.9, (4)h-14.3,
(5)C-12.6, (6)C-7.9, (7)h-11.5, (8)C-15.7

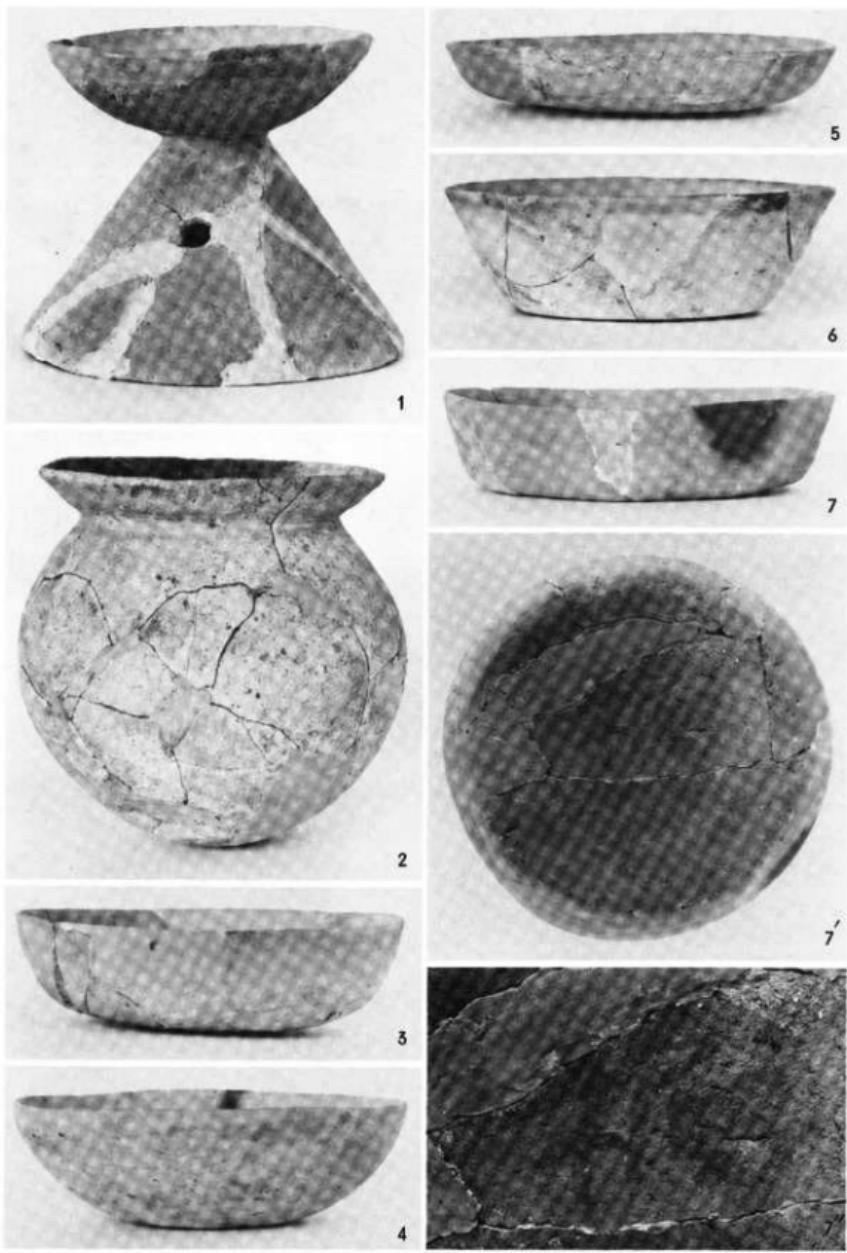


16-L・O・P地区 住居址11(1~8)

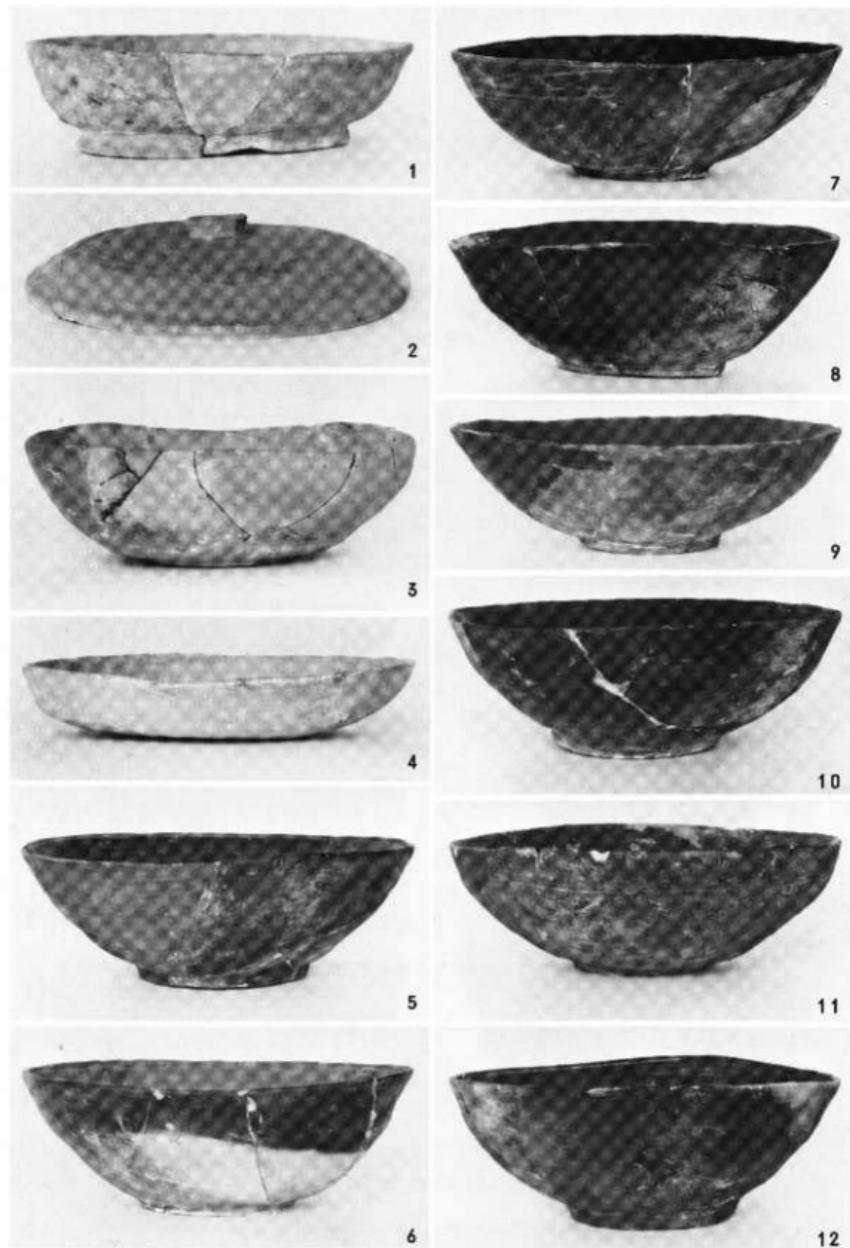
(1) C-32.5, (2) C-31.5, (3) C-19.2, (4) h-12.3, (5) C-38.0, (6) C-15.6,
(7) C-11.4, (8) h-14.2



16-L・O・P地区 住居址11(1~4), 住居址16(5~6), 土器窯I(8~9)
 (1) C-13.2, (2) C-12.0, (3) C-16.5, (4) C-16.9, (5) C-16.0, (6) C-11.0,
 (7) C-11.6, (8) C-17.4, (9) 19.2



16 - L・O・P 地区 土器窯 (1・2), 井戸 1 (5), 井戸 2 (3・4・6・7)
(1) C-8.6, (2) h-14.5, (3) C-18.8, (4) C-18.2, (5) C-21.8, (6) C-12.9,
(7) C-12.6



16 - L・O・P 地区 井戸 8 (1・2) , 溝 2 (3) , 石組井戸 (4 ~ 12)

(1) C-16.7 , (2) C-17.0 , (3) C-11.1 , (4) C-14.8 , (5) C-14.0 , (6) C-14.2 ,
(7) C-14.4 , (8) C-14.6 , (9) C-15.1 , (10) C-14.7 , (11) C-14.1 , (12) C-13.7